

2012 年度第 26 回

松山大学経済学部ゼミナール大会

報告要旨集

2012 年 12 月 1 日（土）

松山大学経済学部

目 次

経済学部学部長挨拶	4
【第 1 部会】	
赤木ゼミ A 班 「地域活性化と若者—松山市における民間部門の取り組み—」	5
久保ゼミ B 班 「地域経済」	6
鈴木ゼミ B 班 「道の駅の現状と活性化の課題」	7
道下ゼミ A 班 「各国のエネルギー戦略・課題」	8
馬ゼミ B 班 「日本の自動車産業の対中進出：現状と課題」	9
安田ゼミ A 班 「アプリケーション生産と収益性」	10
【第 2 部会】	
馬ゼミ A 班 「中国人の環境意識と環境関連政策」	11
久保ゼミ C 班 「地域格差と問題点」	12
鈴木ゼミ C 班 「限界集落の現状と今後の課題」	13
道下ゼミ B 班 「中国とインドの経済成長の比較」	14
松井ゼミ 「日本農業の現状と棚田の将来」	15
赤木ゼミ B 班 「在宅ワークの普及：各国の事例から」	16
【第 3 部会】	
久保ゼミ D 班 「Twitter と人間関係」	17
道下ゼミ C 班 「世界の自動車産業の国際的な展開」	18
入江ゼミ A 班 「自動車メーカーと次世代車」	19
松浦ゼミ A 班 「なでしこ J a p a n の経済効果」	20
谷口ゼミ A 班 「『坂の上の雲』が松山市に与えた経済効果」	21
宮本ゼミ D 班 「消費税を増税するべきか」	22
【第 4 部会】	
安田ゼミ C 班 「スマートフォンが及ぼす社会的影響」	23
入江ゼミ B 班 「脱原発に向けたプロセスと課題」	24
松浦ゼミ B 班 「ユーロ危機」	25
熊谷ゼミ 「ファッションに対する嗜好の差に関する研究」	26
光藤ゼミ 「インターネットの新しい利用法が社会にもたらす影響を考える」	27
道下ゼミ D 班 「通貨危機～ブラジル・アジア通貨危機から見た EU のこれから～」	28

【第5部会】

松浦ゼミ C 班	「消費税増税には反対である」	29
橋本ゼミ A 班	「食文化ーB級グルメによる地域活性化ー」	30
張ゼミ A 班	「震災による東北の産業被害と復興」	31
谷口ゼミ B 班	「ユーロ危機 ～ギリシャとスペイン～」	32
入江ゼミ C 班	「再生可能なエネルギーについて」	33
松本ゼミ	「現代ファイナンス理論の応用としての地元企業研究」	34

【第6部会】

橋本ゼミ B 班	「再生可能なエネルギーを生かしたまちづくり」	35
安田ゼミ D 班	「スティーブ・ジョブスからみる情報技術革命」	36
宮本ゼミ A 班	「今後企業はどこに国に進出するのか？」	37
張ゼミ B 班	「現状から見る電源構成のあり方」	38
掛下ゼミ	「サブプライム問題はどのように世界へ広がっていったか」	39
渡邊ゼミ	「西洋の食の歴史」	40

【第7部会】

橋本ゼミ C 班	「愛媛の銘菓の販売動向」	41
宮本ゼミ B 班	「中国の経済成長が続くためには」	42
川東ゼミ A 班	「愛媛の偉人・日本の偉人の研究～正岡子規と夏目漱石～」	43
間宮ゼミ A 班	「東日本大震災による訪日外国人旅行客の減少に伴う経済波及効果」	44
張ゼミ C 班	「節電のためのインセンティブ制度」	45
久保ゼミ E 班	「教育から見る人間と経済」(ポスターセッション)	46

【第8部会】

張ゼミ D 班	「社会保障と税の一体改革」	47
川東ゼミ B 班	「日本の偉人、郷土の偉人～渋沢栄一と秋山好古～」	48
間宮ゼミ B 班	「家庭の節電による経済効果」	49
宮本ゼミ C 班	「消費者の購買行動の変容」	50
橋本ゼミ D 班	「地域活性化と NPO」	51
久保ゼミ F 班	「愛媛の養殖産業について」(ポスターセッション)	52

【第9部会】

間宮ゼミ C 班	「エコカー減税と補助金政策の経済効果」	53
鈴木ゼミ A 班	「商店街の現状と展望」	54
清野ゼミ	「エネルギー・環境・原発事故と日本の再生」	55
安田ゼミ B 班	「違法ダウンロードが与える影響」	56
久保ゼミ A 班	「東京スカイツリー」	57

第 26 回松山大学経済学部ゼミナール大会報告要旨集によせて

経済学部長 間宮賢一

経済学部ではゼミナールでの学習・研究活動を活性化する目的で、1987年よりゼミナール大会を開催しています。今回で 26 回目を数えます。学部行事としてのゼミナール大会には原則すべてのゼミが参加することになっており、本大会には、20 ゼミ 53 班、430 名の参加がありました。

大会では 9 部会に分かれて、ゼミナールでの研究報告を行っていただきました。テーマは、エネルギー問題、金融危機、消費税、情報技術、地域経済の活性化、途上国の経済成長、愛媛の偉人、ファッション、スカイツリーやなでしこ Japan の経済効果など多岐にわたりました。本大会でも各部会の参加者お互いに評価し合ってもらい、各部会で最優秀ゼミあるいは班を 1 つ、優秀を 2 つ表彰することにしました。

ゼミナール大会参加者に大会についてのアンケートに答えてもらいました。全体としてゼミナール大会が満足できたと回答した学生は 29.8%，おおむね満足できた学生は 43.9% でした。この結果は、ゼミナール大会に真面目に取り組んだ学生が、半数以上の 56.2% であったことによると思います。ほぼまじめに取り組んだ学生 33.3% と合わせると 9 割の学生が真面目にゼミナール大会に臨んだということになります。その結果、スキル・アップにつながったという学生が 76.7%（つながったと思う 32.3%，ある程度つながったと思う 44.4%），就職に役立つと答えた学生が 64.9%（役立つと思う 29.1%，ある程度役立つように思う 35.8%）となっています。このように、評価できる点がある半面、反省しなければならない点もあります。ゼミナール大会に向けての準備段階で、ゼミや班の中で負担の偏りがあつたと答えた学生が 6 割（偏りがあつたと思う 28%，ある程度あつたと思う 32.8%）を超えていました。まだまだ、全員の主体的参加という状況になっていないのではないかと思われまふ。なお、大会当日はいくつかのゼミで 2 回生も聴衆として参加しておりました。2 回生の 85.6% が 3 回生の取り組みが十分であつたと評価し、その結果、87.2% がゼミナール大会に出席して、知識が増えたり、興味・関心が高まったりしたと回答しています。

以上のように、学生自身による評価は肯定的なものでありましたが、満足できる水準にまで達したとはまだまだ言えまふ。3 回生は就職活動や卒業論文執筆に向けて、引き続き研究水準やプレゼンテーション能力の向上に努めてほしいと思います。2 回生は日常的に現実に目を向け、しっかり学習を積み重ね、次回ゼミナール大会で充実した研究報告が行えるよう頑張ってもらいたいと思います。

1 発表論文の趣旨

今、全国的に少子高齢化は進んでいる。これは松山も例外ではなく、深刻な問題となっており、またそれにより地域の元気がなくなり賑わいに欠けている。そこで私たちは松山市における地域活性化にむけた活動について、民間部門による若者に対する取り組みに焦点をあてて検討した。具体的には以下の 3 つの事例をとりあげた。

第 1 章では「愛タッチ」という四国最大の合コンイベントを取り上げた。実際に「愛タッチ」に参加してインタビューなどの調査結果をもとに、どれくらいの集客に成功し、若者向けの取り組みとして貢献しているのか、について論じた。

第 2 章では愛媛の地元アイドルである「ひめきゅん」を事取り上げ、「ひめきゅん」のコンサート会場でのインタビューなどの調査結果から、若者からの注目度について論じた。

第 3 章では「松山モードフェス」というアパレルショップによるファッションショーを取り上げ、「モードフェス」への参加者や参加ショップなどへの聞き取り調査をもとに、フェスが若者を対象とした地域の活性化にどの程度貢献しているかについて論じた。

2 部会・分科会での討論内容

当日は、会場内での質問はでなかったが、事前の質問状ではいくつかの質問があった。なかでも、「モードフェスの知名度を上げるためには何をすればよいのか」という質問が複数みられた。その解答として「モードフェス開催日 1 ヶ月程前から、街のアパレルショップを訪れた人たちにチラシを配布すればよいのではないかと思う」と回答した。

3 ゼミナール大会で学んだこと

計画通りにいかなかったため、発表までの 1 ヶ月はかなりばたばたしてしまった。やはり、余裕をもって取り組むことが大切であると強く感じた。また、プレゼンテーションに関しても文字数が多い、字が小さい、色使いなどに問題が多く改善に時間がかかった。パソコンの扱いに慣れている人が少なかったということもあるだろうが、もう少し効果的に使えるようにならなければならないと痛感した。

今回、松山市における地域活性化にむけた取り組みを調査してみて、松山市においては民間部門がさまざまな活動を行なっていることを改めて知ることができた。松山に住んでいる人間としてもっと松山のことについて知らなければならないと思った。今後はどういう取り組みを行なっていくのか注目していきたい。

久保ゼミ B 班 報告書 地域経済

瀬戸丸翔太 松本亮矢野隆貴 山下和哉

僕たちは、四国中央市・三豊市・新見市の人口・基幹産業を比べどこが違いどのようにすれば地域活性化につながるかを検討しました。また内子町をまちづくりのモデルにしどのようなことをしているか、どのようにすれば地域活性化を図れるかを考えました。最後に地元の人しか知らないスポットを知り、認知度をあげるため、愛媛県人・県外の人がいったことのある市を調べることにより、観光頻度の比較から人気の理由などを推考するためにアンケートを実施したのでその報告を発表しました。

まず四国中央市・三豊市・新見にの三つの市の比較についてですが、それぞれの地域の基幹産業の大きさが違いその違いが地域の人口などと比例してくると考えました。また内子町を例にあげての地域活性化の案として考えたのが、

- ・ 四国中央市…内子町の元気商店街プロジェクトより市外からの来訪者の購買力を確実に吸収するために、特産品などを販売する特設コーナーを設置するなどして個性と魅力ある商店街づくりをする。
- ・ 三豊市…内子町の景観まちづくりプロジェクトより三豊市の特性（自然豊か）を活かし、町並み保存をしていくとともに、その特性を PR していくことで地域活性につなげていく。例としてホテルやカブトムシなどの都会ではみられない昆虫などを推していくなどすればいいと考える。
- ・ 新見市…新見市の要となる産業を活かすために、担い手の育成と確保が重要であり、耕作放棄地や手入れ不足森林を減らし、回路軸をなす広域道路網の整備とこれに接続する道路の整備を行う。これにより特産物であるブドウ、モモ、トマトなどの農林産物の集出荷をはじめとする物流を活性化することによって、これまで以上に効率化を図ることができると考える。以上のような結論に至りました。

その内子町のまちづくりの製作について

戦略1・・・地域の魅力を高め、人口減少を食い止める

戦略2・・・産業の改革に取り組み、多様な雇用を創出する

戦略3・・・町民の自治力を強化し、安全・安心の地域をつくる

主なプロジェクト・農林産業再生プロジェクト・景観まちづくりプロジェクト・元気商店街プロジェクト

アンケート結果から地元に戻って就職する人が多いことから地元への愛着信があるのだとわかりました。また訪れた地域を比較するとエミフルやとべ動物園などの娯楽施設がある所に多く人が集まっているとわかりました。しかしあまり人が訪れていない市でも魅了てきで地元の人しか知らない観光スポットが多くあったのもっとPRしていけば多くの人が集まると考えました。

今回のゼミナール大会で他のゼミの発表を聞いていると実際に街の人にアンケートを行ったり地元の人と一緒に活動することで実際のお客さんの生の声を聞き自分達で意見を出し合っていたので是非見習って次の機会にはもっと活動の幅を広げ多くの人の意見を取り入れたものにできたらと思いました。

道の駅の現状と活性化の課題

鈴木ゼミ B 班 代表 河野貴大

1. 報告論文の要旨

「道の駅」は休憩・情報発信・地域の連携の役目を担ってきたが、今日その果たすべき役割が変化している。その要因は、①直売所の開設件数の増大に伴う過当競争、②農家(出荷者)の高齢化、③人口の減少、④直売所の農村から都市への動き、⑤市町村の合併などがある。市町村合併以前は通常 1 つのまちに 1 つの道の駅があったが、合併以降、1 つのまちに複数の道の駅が存在するようになった。このため、役場・行政からの支えがなくなり、道の駅のまちづくりにおける位置づけ、基本戦略、運営実態の評価や戦略の組み直しをする運営主体が消滅した。また、道の駅は全国に約 1,000 か所あるのに対して、直売所は約 17,000 か所もある。近年は、都市部に相次いでオープンし(都市近郊型直売所など)、道の駅まで足を運ばなくてもスーパーや百貨店などで商品(特産品・農産物)を購入することができ、その立地の良さから消費者側の反響が大きい。道の駅を取り巻く環境が変化しているのである。こうしたことを踏まえ、道の駅の今後のあり方及び地域経済の持続的発展の新たな切り口として、「連携」が挙げられる。その一例として「奥伊予街道七駅物語」である。奥伊予街道七駅物語とは、七つの道の駅(大洲まちの駅あさもや・清流の里ひじかわ・きなはい屋しろかわ・日吉夢産地・森の三角ぼうし・虹の森公園まつの・道の駅みま)が連携することで、効率的にモノやサービスなど新しい価値を生み出し、道の駅に期待される地域の連携機能を相乗効果で発揮していくことを目的とする取り組みである。

道の駅の今後のあり方を考えていくにあたり、当該道の駅に行かないと得られないものを創り出していく必要がある。そのためには休憩機能・情報発信機能・地域の連携機能のうち、特に「地域の連携機能」を全面に押し出していく必要がある。道の駅はただ立ち寄って休憩するだけの場所ではなく、都市から訪れた人がその地域の自然・環境に触れ合うことができ、都市部では到底味わうことができない「農村らしさ」を味わえるようにすることが必要であり、都市と農村の連携をさらに強めてくべきである。道の駅を通して農村の良さを知ってもらうことが鍵なのだ。

2. 質疑応答の内容

Q.道の駅みまの来客数が多いのは高速道路の延伸のみが影響か？

A 駐車場の大きさなど道の駅の規模自体も少なからず影響している。

Q.今後農家の減少を抑えるにはどうすればよいか？

A.農作業体験などを実施していくべきである。

3. ゼミナール大会で学んだこと

各ゼミの研究分野が幅広く、自分たちの知らなかったことがいくかありました。これまで研究してきたことをただ論文としてまとめるだけでなく、プレゼンというかたちで共有することは非常に意味のあることでした。地域経済学を論理的に学び、さらにフィールドワークを実施しているゼミは、発表内容に厚みが増していると感じました。

ゼミナール大会報告書 道下ゼミ A 班

各班論文の要旨

・久保ゼミ

四国中央市、三豊市、新見市の3つの市に重点を置き、各市の人口や基幹企業、合併の経緯をまとめ、活性化には何を行えばよいのか、という研究をしていた。

・馬ゼミ

ホンダやトヨタ、マツダといった有名企業の中国に対する業務拡大の課題や現状についての研究をしていた。

・安田ゼミ

広く普及しつつあるスマートフォンのアプリに目を付け、iPhone と android における有料アプリと無料アプリの販売における収益の違いについての研究をしていた。

・道下ゼミ

世界各国のエネルギーの現状と課題において日本、アメリカ、中国、ヨーロッパに目を当て、原発、天然ガス、クリーンエネルギーについて調べ、世界各国がこれから頼るべきエネルギーについて考察している。

・赤木ゼミ

松山市における若者に対する民間部門の取り組みである、愛タッチ、ひめキュンフルーツ缶、松山モードフェスに目を当て、それらがもたらす経済効果について研究をしていた。

・鈴木ゼミ

道の駅の現状と課題を実際に道の駅を利用している客にアンケートを行い、研究をしていた。

ゼミナール大会の感想

ゼミナール大会を通して感じたことは、各班の調査量の違いである。一番すごいと感じた班は鈴木ゼミである。実際に色々な道の駅に赴きそこを利用しているお客さんにインタビューをしていたり、交通量の調査をおこなったりしており、非常に感心した。それだけの事をしている通り発表も素晴らしいもので、一番の発表に感じた、

また、発表の方法にも違いが感じられた。ただパワーポイントに書いてあることを読み続ける班や、一定の速さでただ読み続けるだけの班など様々だった。その中で、赤木ゼミと鈴木ゼミの班の発表は上手かった。聞き手にこの発表を聞かせたい、と感じさせるような言葉の使い方で、聴いていて楽しかった。自分たちは、発表の方法はほとんど考えずに、発表の内容にばかり目向けており、勉強になった。

ゼミナール大会で学んだこと

先程も書いたが、学んだことは発表の工夫である。論文を読んだだけではあまり惹かれる内容ではなかったものが、発表のうまさで興味の惹かれるものになった。このように発表への工夫は発表を聞いてもらうに当たって非常に有効である。これが、私がゼミナール大会で学んだことである。

日本の自動車産業の対中進出：現状と課題

馬ゼミB班

報告論文の要旨

中国自動車産業は旺盛な国内需要を背景に 2009 年に生産台数世界一となった。一方、完成車メーカーだけで 100 社以上存在し、多くの旧型・小型生産設備が用いられているため、生産性は低い。中国は世界の自動車生産大国である。自動車生産台数は 2006 年にドイツを超え、2008 年には世界第 2 位であった米国を上回った。さらに 2009 年について日本を追い抜き、世界最大の自動車生産国となった。2010 年の自動車生産台数は 1,826 万台に達し、世界の 23.5% を占める。

この背景には旺盛な国内需要がある。中国の国内需要は米国には及ばないものの、ドイツの 2.4 倍、日本の 1.8 倍に達する。中国の自動車産業を取り巻く環境において特筆すべき点は、2000 年代前半まで自動車の普及は政府高官や企業経営者・マネジメント層を含む高所得層に限られていたものの、2000 年代半ば以降、低所得層から高所得層に至るまでいずれの所得層においても自家用車の保有台数が急増したことである。国家統計局によると、2009 年の都市部人口は 6 億 2,186 万人であった。1 世帯あたりの平均人数は 2.89 人であったため、家計調査で中位 20% と分類される世帯数は約 4,304 万世帯となる。中位 20% 層 100 世帯あたりの保有台数は 7.43 台であるので、その保有台数は 2009 年時点で 320 万台になる。2005 年時点の中位 20% 層の保有台数は 66 万台にとどまっていたことから分かるように、2005 年から 2009 年末にかけて、中位 20% 層の自動車保有台数は急増した。同期間において、中上位 20% 層も 124 万台から 587 万台へと飛躍的に伸びた。中間層が台頭したことで、自動車市場の層の厚さが増したといえよう。加えて、低所得層においても自家用車保有台数が増加した。下位 20% 層の保有台数は 2005 年の 18 万台から 2009 年の 72 万台に達した。中下位 20% 層も同じく 35 万台から 179 万台に大幅に増加した。

日系自動車メーカーの販売台数には、尖閣諸島問題をめぐり、中国で高まっている反日感情の影響が表れた。9 月中旬以降の反日デモの影響で工場が一時停止になったほか、販売減を見込んだ工場稼働率の引き下げなどが響いた。

中国で現地生産する 6 社は、いずれも 2 桁のマイナス幅だった。2011 年 9 月は中国政府が同年 10 月から実施した低燃費小型車に対する販売補助金制度の燃費基準の厳格化を控え、駆け込み需要があった。さらに東日本大震災からの挽回生産が始まっており、これらの反動も加わったことでマイナス幅が大きくなった。

ゼミナール大会で学んだこと

どの班の発表も、とても興味深いものだった。しかし、発表者の力量と、どれだけ練習をしてきたかで内容を的確に伝えられるかが重要になってくる。班員のやる気当然関わってくるが、私の班はこのゼミナール大会を重要視してはなくて、班員の協力はあったものの自分自身も最低限のことしかしなかった。もっと集まりを増やし、一人一人が自覚を持つことができれば、もっと聞き手の心にうったえられ、さらによりよい発表が出来上がっていたと思う。班長でなければ、このようなことを考えなかった。少人数であったが上に立つものの苦労を知った。

1. 報告論文の要旨

論文の内容は、スマートフォンのアプリケーション生産性と収益性で調べました。まずは、google Play と App ストアでの販売の方法についてまとめ、販売によってうまれる報酬について具体的な数字を例にしてまとめました。また、無料アプリでの販売の長所と短所、有料アプリでの販売の長所と短所をあげて比較した。無料アプリでの主な成功の例を実際のアプリを参考にしてまとめました。結論としてはどちらのほうの方が儲かるかについてまとめました。また、専門用語で少し分かりにくい、開発言語の Java と Objective-C について詳しく調べまとめました。

2. 部会・分科会での討論内容

論文で提出した内容を基にして、それを分かりやすく簡単にまとめたパワーポイントで部会・分科会に参加しました。具体的な数字や文章だけでは伝わりにくいについては、グラフや参考資料をつかって説明しました。しかし、当日の発表予定者が欠席となるトラブルがあり、当初の予定通りの発表をすることができず、非常に内容の薄いものになってしまったと思います。事前準備の段階でトラブルを想定した準備ができていればよかったと思いました。

3. ゼミナール大会で学んだこと

私たち A 班は、真剣に取り組むのがとても遅かったです。もっと早くもっと積極的に協力、調べる事ができればとても面白い内容になっていただけない、とてもおいしい事をしたとおもいません。発表の練習も納得いくものではなかったです。総合評価としては、とても満足いくようなものではありませんでした。しっかりやっているところと比べるとそれは明らかでした。発表の作成から発表まで全然甘かったとおもいます。また、先にも述べたように、当日のトラブルを想定して、例えば発表者が欠席した場合に備えプレゼンの練習は一人だけでなく全員が同じ内容のプレゼンができるように準備ができていればよかったと反省しました。また、発表の仕方、資料を見ての発表と、聴衆を見ての発表の違いを改めて痛感した。資料に語りかけるのと聴衆に語りかけるのとの違いは大きく聞く側の気持ちも考えた発表ができればよかったと思いました。ここまでは本当にダメで反省だらけなのですが、得たものもあります。それは、協力の力です。今回の事は私一人では決して出来るものではなかったとおもいます。取り組みが遅かったのですが、みんなが協力することができ、満足のできるものではなかったのですが、一つの達成感がありました。この達成感がもし、今までの取り組みが完璧であったとしたら一体どれほどの達成感があるのかと思うと少し期待します。これからこのような機会があるかは、分からないが、もしあるとすればここでの反省を生かし完璧な達成感を味わいたいです。そのために、ゼミナール大会で学んだことを、心に留め、もしもう一度このような機会があれば悔いの残らないようにしたいと思います。

1. 報告論文の要旨

私たちの班は、今深刻化している中国の環境問題に目を向け、「中国人の環境意識と環境関連政策」というテーマで研究した。

この研究で明らかにした論点は、大きくわけて3つである。1つ目は、「なぜ中国で重度に環境問題が進行しているか」である。その大きな要因としては、急速な経済成長における犠牲、所得格差による地域性の問題、中国の気候である。2つ目は、「中国の人々は環境に対してどのように感じているのか」である。実際、中国人の環境意識は高まっている。それは、日常生活の不便さや、肉体的な悪影響など身をもって感じている部分が多かった。工場への反対デモや環境 NGO は良い例である。3つ目は、「中国政府は環境問題をどのように捉え、対策に取り組んでいるのか」である。政府としては、環境管理制度として8つの政策を実施しているほか、五ヶ年計画の中にも環境への対策が盛り込まれていた。その効果は別として、国も環境問題への意識は高まっている。

これからは、経済成長による所得増大を優先するのではなく、環境保全にも重点を置いていただきたい。特に環境対策が遅れている内陸農村部では、政府の果たす役割の比重が大きいと考えられる。単に環境対策を当てはめるだけでなく、法秩序や政府の役割といった根本的なシステムを考慮していかなければ、実効性の乏しいものとなると考えた。

2. 部会・分科会での討論内容

発表後の質疑・応答では、パワーポイントにのせていた環境意識のアンケートについて、「それはどこ中国人を対象にしたアンケートか」という質問をいただいた。パワーポイントには引用先などを書いていなかったため、その場では適切な応答ができなかった。これは反省すべき点である。発表後確認した結果、引用先には「中国人 300 人を対象」としか書いていなく、詳しい内容は見当たらなかった。確かに、地域性がある中国では、対象とする人物によってアンケート結果が変わってくると感じた。しかし、アンケート結果から言える中国人の環境意識の高まりには違いはないだろう。

3. ゼミナール大会で学んだこと

私たちの班では、本格的に活動し出したのが1ヶ月前だったので、少し時間が足りなかったように思う。しかし逆に言えば、個人の力や団結力が求められる期間でもあった。私たちの班は、個性が強く、個々の考えをまとめるのが大変だったが、最終的にはみんなで一つの論文を完成できたことは、団結力の結果である。私自身、リーダーとなって班をまとめたが、責任感やリーダーシップをとる難しさを痛感した。しかし、やり終えて自信に変わったように感じる。今回の貴重な体験をこれからの人生の糧にしていきたいと思う。

ゼミ大会報告書

地域格差と問題点 久保進ゼミC班 第二部会

11103126 松根優策

11103772 吉岡祥吾

11103130 松本歩

格差の生まれる原因

私たちは、格差の生まれる原因として最も大きなものは都市部への人口集中だと考えた。地方から都市部への人口流出により、若者のいなくなった地方の経済はみるみる衰退し、結果このような国内での経済格差が生まれていると思われる。

地方の人口減少、都市部への人口集中が格差につながる理由として、人口減少は企業にとって消費者の減少に直接つながっていくからではないかと私たちは考えた。都市部への人口集中を食い止めるために、地方がどのような対策を進めていくかが重要である。

また近年問題となっている非正規雇用の拡大も原因と考えられる。

格差の生み出す問題

格差の引き起こす主な問題として生活保護問題がある。生活保護は年をとって収入がない人、病気や障害を持った人、また子どもが小さく思うように働けない人、医療費を払うことができない人などに一日でも早く自分の力で生活していけるように手助けする制度である。しかし今の日本の生活保護は格差社会の影響を大きく受けて年々受給者が増加し、その財源は日本の財政を相当圧迫している。このため、現在では本当に支給しなければいけないような人へ支給できない崩壊寸前の状況になってしまっている。

政府の対策

非正規雇用の拡大について

政府は派遣労働者を無期、又は6カ月以上の有期で直接雇い入れた事業主に奨励金を支給する派遣労働者雇用安定化特別奨励金という制度によって、非正規雇用者の減少でなく、非正規雇用の安定という方向で対策をしている。しかしこの対策は平成24年3月31日までの暫定措置となっている。

結論

都市部への人口集中、また非正規雇用の拡大などが地域格差の生まれる主な原因ということがこの調査でわかった。地方の高齢化は、都市部への人口流出により、さらに高まっており、都市部への経済、人口の集中は、所得格差として現れ、さまざまな問題を引き起こす。その結果また地方から若者が減ってしまう。この悪循環を断ち切るためには、地方の特色を活かした産業を発展させ、雇用の拡大につなげることが大切である。

1 報告論文の要旨

私たちは「限界集落」について調査してきた。中山間地域を中心とする、いわゆる条件不利地域では「限界集落」が拡大しており、中でも愛媛県は中四国で最もその傾向が強く、残念ながら消滅した集落も少なくない。愛媛県における「限界集落」の現状を理解した上で、持続可能な発展への道を考察するために、私たちは愛媛県内子町の「限界集落」の現地調査を行った。我々の立場は、限界集落を維持するというスタンスである。その大きな理由は、地域住民が自分たちの地域に愛着を持っているからだ。地域再生に関しても、豊かな自然があれば、それを活かした生活を忙しい都会の人に提案することができる。古民家再生での集落再生の例もある。Iターンも積極的に受け入れている。自分たちの持っている豊かな資源を今後さらにどう活かしていくか、Iターン者をいかにして呼び込むかが大きなキーワードとなっている。限界集落を維持することは国土保全につながり、私たちの安全な生活に欠かせない。

2 質疑応答の内容

当日、フロアからの質問が無かったが、事前の質問では下記のとおりであった。いくつかを掲載する。

Q 20 項より「若者の林業離れが進む一因」とあるように後継者不足が問題となっているがそれを解消する取り組みなどは行われているのか？

A 全国的にみると「緑の雇用」という取り組みが実施されており、その内容は未経験者でも森林の仕事に就き、林業に必要な技術を学ぶことができる。森林組合などの林業事業体に採用された人に対し、同事業体を通じて講習や研修を行うことでキャリアアップを支援するという制度である。この取り組みによって事業前は年間平均約 2000 人だった新規就業者数が実施以降 3000 人に増加している。

Q 「白タク問題」は現在ではどうなっているか？

A 改正道路交通法が施行され、それまで白タク行為であるといわれていたボランティア運送が法律の枠内であれば白タク行為ではないという認識で福祉有償運送がスタートした。謝礼程度であれば金銭の收受ができるようになり、解決の方向へと向かっているといえる。

3. ゼミナール大会で学んだこと

自分達の調査研究を協力し合ってまとめ 1 つのものとするの大変さや、その目標に向かって努力することの大切さなどを学んだ。まず自分達の研究テーマについて、班員が現地で聞き取り調査をし、その中で調査の要領や協力することの重要性を実感した。

論文作成にあたっては、論文作成の方法を学ぶとともに、自分本位の文章ではなく、読む人の立場に立って読み易い文章を作成することを全員が心掛けて作成した。質問を考えるために、文章を何度も読むことにより、他人の書いた文章を客観的に評価する能力の強化に繋がり、また自分達が作成した文章に対する第三者からの様々な貴重な意見を聞いて、これからの論文作成における注意する点などに気付けた。

そして、ゼミナール大会本番については、パワーポイントを用いて他者に自分達の意見を発信するという今までにない経験が出来、それ自体が自分達にとって大きな勉強になった。自分達の意見を他者に伝えることの大変さやその方法を知ることが出来た。

ゼミナール大会では調査から論文作成、質問状交換、本番に至る全ての過程で多くのことを学べ、とても有意義なものであった。

1.報告論文の要旨

私たち道下ゼミB班は「中国とインドの経済成長の比較」について報告を行った。報告論文の主な目的は、中国とインドの経済成長モデルを比較することによって、これほどまでに成長できた要因と問題点を考察していくことである。私たちの班では、調べていく中で中国が外需成長、インドが内需成長であると予想を立てた。

内容としては、第1章が導入。第2章では1999年から現在までの中国経済について、第3章では1991年から現在までのインド経済について説明している。第4章では、両国に共通する①人口②経済成長率③格差問題④BRICsの4点について比較した。また、両国の経済成長を内需と外需を比較して考察した。最後に第5章でまとめ、といった論文構成となっている。両国の内需・外需を比較した結果、予想に反し両国ともに内需の割合が圧倒的に高いことがわかった。

2.部会・分科会での討論内容

今回は報告会という形を取ったため、討論は行わなかった。報告後に、各班から受け取った質問状の回答を行った。

3.ゼミナール大会で学んだこと

ゼミナール大会を通して学んだことは、協調性と発表することの難しさだ。約2万字の論文を完成させることや発表するための原稿、パワーポイントの作成など一人では出来ないようなことも、みんなで協力することで発表できるところまでこられたと思う。約半年前に、どのようなテーマで発表するか考えるところから何回も話し合いや試行錯誤してきたことは、すごく大きな経験になったと感じた。

準備期間も含めたゼミナール大会は、就職してから役に立つものだと思う。テーマに関連する資料をたくさん集めて論文を作成する作業や、論文を分かりやすく発表するためのパワーポイントの作成など大変な作業はたくさんあった。しかし一番難しいと感じたのは、言いたいことを相手にわかりやすく伝えることだと思った。発表する時間は、限られているので、そのなかで分かりやすく、自分たちが伝えたいことを発表するための工夫が必要だった。最終的に上手くできたかどうかは、わからないけれど貴重な経験だったと思う。

ゼミナール大会では、班員と協力することで無事に発表できるところまでたどり着いたが、卒業論文や会社でのプレゼンなどの準備を一人でしなければいけないこともある。そこで、このゼミナール大会で学んだことを生かさなければいけないと思う。自分の言いたいことを分かりやすく伝えることは、将来必ず必要になる。ゼミナール大会は、これからの自分たちのための練習だったと感じた。学生のうちにたくさんこのような経験ができることに感謝したい。

第 26 回松山大学経済学部ゼミナール大会報告書

文筆:松井ゼミ代表 松井勇樹

1. 報告論文の要旨

私たち松井ゼミの論文及びゼミナール大会での報告のテーマは「日本農業の現状と棚田の将来」である。私たちは、この1年間東温市の河の内で農家やNPO 法人との協力の下、米を苗の状態から栽培し販売まで行うという取り組みをしてきた。この活動の中で、農業の大切さや大変さ、そして素晴らしさを知った。しかし、日本の農業は多くの問題を抱えている。そこで、日本の農業の現状を、後継者、米の価格、里山での取り組みという3つの観点から分析した。大きな問題としては、後継者不足と米の価格低下である。後継者不足の改善策としては6次産業化による規模の拡大という結論が出た。米の価格低下については、米と合わせて他の農作物を栽培し出荷するという解決策を考えた。その具体例として、里山での取り組みを挙げた。また、私たちのやってきた活動を通して学んだことを踏まえて日本の農業の抱える問題について考えた。その結果、私たちのように普段農業に関わっていない学生が教育の一環として現場に出て農業を行うというのが解決策の1つだという結論が出た。

2. 部会・分科会での討論内容

当日、松井ゼミから部会内の他のゼミへの質問はなかった。また、松井ゼミの報告に対してフロアからの質問もなかった。私たちは、事前に各ゼミから受け取った質問状に対する回答のみ行った。質問と回答の一例である。質問「なぜ農業を新たに始める人は増えているのに、未使用棚田が減ることなく逆に増加しているのかについて回答をお願いします。」回答「新規就業者は農業法人に入る人が多い。そういったところは、平地で大規模でやっている。集落単位でやっている棚田では新規就業者が増えにくい。結局、耕作放棄地で条件の悪いところでは新規就業者は増えず耕作放棄地は減らないのである。」

3. ゼミナール大会で学んだこと

今回ゼミナール大会で学んだこととして、大きく3つある。1つ目は、ゼミ内での連携の必要性である。ゼミ大会という1つの目的を達成するためには、全員がそれぞれ役割を担い、内容に関してもしっかりと共有しておく必要があった。他のゼミの準備段階、そして報告を見ていると、全てのゼミが完璧に出来ていたというわけではないが、ゼミ内での連携が取れていた。しかし、今回私たちはそれがきちんできていなかったのも、今後の反省点でもある。2つ目は、分かりやすいプレゼンテーションの方法である。私たちの部会では、赤木ゼミB班の報告が特に分かりやすかった。そのポイントとして、スライドの情報量を絞り必要最低限にするという工夫、発表者が内容を理解して台本などを持たずに堂々と発表するという2点が挙げられる。これには、準備段階からの工夫がいるだろう。3つ目は、新たな知識である。他のゼミの報告の中には、今まであまり注目してこなかった話題がテーマとなっているものもあり、各ゼミの報告を通して勉強になったところがあった。

(1) 報告論文の要旨

私たち赤木ゼミ B 班は、近年増加傾向にある在宅ワークの普及について、ドイツ・アメリカ・フランスなどの欧米諸国の政府による取り組みと、日本における企業の取り組みに焦点をあてて検討した。検討の結果、各国とも在宅ワークが普及していることが確認された。また、在宅ワークの普及がもたらす影響は多方面にわたり、日本が抱えている諸問題の解決の糸口になると考えられるが、その一つの可能性として、都市一極集中化の是正を指摘した。具体的には、IT 技術の発達によって在宅ワークが増加し、都市に行かなくても都市以上の仕事ができ、都市の会社に行く必要がなくなる。それに伴い、都市に集まるメリットが少なくなり、都市に機能を集中しなくてもよくなる。これらの結果として、都市一極集中化の是正につながる可能性があるということである。

(2) 部会・分科会での討論内容

部会での発表は、パワーポイントを用いて行い、聴衆には、パワーポイントのスライドを印刷した 4 枚を資料として配布した。報告としては、基本的に上記の内容を発表した。限られた時間の中で、聴衆に私たちの報告を伝えるために、出来るだけ図表を用い、文字を少なくし、言葉で補足説明を行うよう心がけた。私たちの班の発表者は、原稿を暗記していたので、パワーポイントのスクリーンを指しながら、まるで大学の講義のように流暢に報告を行うことができたのではないかと思われる。また、報告後には、質問状への回答を、同じ部会の他のゼミからいただいた質問のなかから 1 つずつ選び、全てのゼミに対して回答することができた。

(3) ゼミナール大会で学んだこと

今回のゼミナール大会で学んだことは、論文作成やパワーポイント作成も大変だったが、それら以上にプレゼンの準備や練習をしなければならないということである。せっかく苦労して集めたデータや作成した図表も、プレゼンが上手くいかなかったら、大変もったいないし、悔しい。だからこそ、プレゼン時にただ原稿をずっと見ながらしゃべるのではなく、聴衆に分かってもらえるようにするために練習が必要であると感じた。論文作成、パワーポイント作成、発表練習、これらすべてにおいていえることは、常に、聞く側のことを考えながら、分かりやすいものをつくるということが大事なのだと分かった。

ゼミナール大会報告書 Twitter と人間関係

第3部会 久保ゼミD班 濱田原輝 池田卓哉

1、昨今、Twitterはコミュニケーションの一部としてメディアだけでなく私たちの生活にも影響を及ぼしている。Twitterは人間関係にプラスに作用していると推測する。興味のある情報をより早く入手しようとする行動は結果的に他のユーザーを必要とするので、そこにコミュニケーションが形成され、そこでは情報入手の為に円滑な人間関係があると考えられる。私たちの身の回りではどうなのか、人間関係に影響はあるのか調査したいと思いテーマとした。Twitterのマイナス面について話したい。Twitterにおいても人間関係の面倒くさいことが存在する。例えば良い人を演じてしまうことやどこか相手の機嫌を伺っていることなどである。気軽に使えるTwitterにもどこか現実世界と変わりのない人間関係の面倒くさいことが存在する。これはTwitterがマイナスに作用している面といえる。一方でTwitterのプラス面についてもみていきたい。Twitterを使用した結果私たちに何をもたらしたのか、どんな影響を及ぼしたのかのアンケートではプラスの面が多く見られる。情報を早く入手できる、普段の私生活では絶対に関われない人と関わるができる、様々な人と様々な話題について議論できるなどである。私達は、Twitterが人間関係にプラスの影響を及ぼすと推測して、本学の学生にアンケートを行った。結果として、プラスの面もあったが、マイナスの面も大きく作用した結果となった。以上のことから、Twitterは使い方次第で私たちに人間関係としてのプラスの面をもたらしてくれるしマイナスの面ももたらすと考える。

2、討論は行われていません

3、今回ゼミナール大会参加にあたって、最初の段階では経済分野に関連した論文のテーマを選択していた。しかし、経済関連のテーマはとっつきにくくなかなか手が進まず難航することが多々あった。私たちのゼミの担当の久保先生は人間関係について詳しいということもあり、テーマの助言をもらうなかで人間関係をテーマにした論文を書きたいと思うに至った。やはり分野に富んだ専門の先生の助言があるかないかは大きく、論文の質にも影響してくることがわかった。私たちの班は2人で全ての作業を行ったのでところどころ助け合うことが多く、結果どちらも真剣に取り組むことができた。一人の考えでは息詰まる場面であっても、もう一人の考えをプラスすることで展開は開けることが身にしみて感じることもできた。ゼミナール大会で感じたこととして、他のゼミの班はアンケートをとっているところがあまりなかった。私たちがテーマとしたTwitterと人間関係はアンケートが大部分を占めることとなった。アンケートの重要性が増したことで、一つ一つのアンケートの質問を考えるのに時間が掛かりかなり大変だった。的はずれな質問をすると回答が全く集まらないのでポイントをついた質問をすることが重要であることを学ぶことができた。何よりも重要かつ難しいとわかったのが論文を書くにあたって最初に決める最終的なテーマや論点、予想される結論であった。この部分がブレると全体が成立しないのでとても重要であることを学ぶことができた。私たちにあってゼミナール大会は自身を成長させることができる場であったと共に、有意義な時間であった。

道下ゼミ C 班 ゼミナール大会報告書

1. 報告論文の要旨

道下ゼミ C 班は、世界の自動車産業の国際的な展開について調べました。1 章では世界の自動車産業の危機について調べ、2008 年の世界的経済危機や東日本大震災について述べました。2 章では世界の自動車産業の現状・戦略について調べました。この章では、トヨタ自動車、GM（ゼネラル・モーターズ）、VW（フォルクスワーゲン）、現代自動車についての現状とこれからの戦略について詳しく述べました。次の 3 章では、2 章で調べた 4 社に共通していることを調べ、まとめました。そして最後の 4 章では、全体的なまとめを述べました。

2. 部会・分科会での討論内容

特になし

3. ゼミナール大会で学んだこと

今回のゼミナール大会で情報収集能力が格段に上がったように思います。私たちは夏休み前から資料を集め始め、普段あまり使っていない図書館を利用するいい機会にもなりました。このおかげで新聞、雑誌などの資料を大量に集めることに慣れたように思います。これだけの期間をかけて集めた資料を最終的に 15 分の発表に凝縮するというのは、非常に大変な作業でした。しかし、ゼミナール大会を終えてからの達成感というものはすさまじいものでした。半年近くかけて準備してきたものだったので、当然といえば当然かもしれません。今までの人生で、一つの発表のためにこれだけの期間準備するという経験がなかったので良い経験ができたように思います。就職活動の際には話題としても使えるほど頑張ったように思います。

ゼミナール大会で学んだことは、資料収集の大切さの他にもあり、他人に自分の調査した内容を分かりやすく発表する難しさも学びました。パワーポイントを作る際には、なるべく内容を簡潔に分かりやすくしました。ただ、もう少しグラフや図を入れた方が分かりやすかったように思います。発表では、パワーポイントの文字がスライドからはみ出すトラブルもありましたが、発表時間も 14 分と、まあまあ良い発表ができたのではないかと思います。

これらのゼミナール大会で学んだことを、これからの就職活動、また就職してからも有効に活用していきたいと思います。

ゼミナール大会報告書

入江ゼミ A 班 代表者：川崎晃司

1. 報告論文の要旨

今回、地球温暖化という環境テーマのもとで、近年話題となっている「エコカー」を取り上げた。自動車は普及して1世帯に1台ほどは所有している現在であるが、それに伴って自動車の排出する環境汚染物質の影響は深刻なものとなってきている。そこで登場、名乗りをあげてきたのが「エコカー」である。

まず、エコカーの定義、国民・政府の認識について。エコカーの定義というのは、やはり国民と政府間で差異が生じており、普及難も存在する。その背景には、消費者側からの意見として、3低と呼ばれる、「低価格」「低燃費」「低維持費」が根強い。この条件をクリアすることが普及へのカギであるが、企業側の課題として環境面の問題も欠かせない。

次世代を担う自動車として、「ハイブリッドカー」「電気自動車」「低燃費車」「電池自動車」などがあげられるが、上述した課題のクリアが急がれる。「ハイブリッドカー」は電気とガソリンの2つの動力をもつ自動車であるが、エンジンの駆動方式も多様である。パラレル・スプリット方式から始まり、現在では、シリーズパラレル方式も採用されている。電気を動力として使用するため、その分のエネルギーは地球にやさしいといえるし、電気のほうが圧倒的に安価である。その反面、開発コストや充電池交換コストが追いついていないのが現状である。次に「電気自動車」だが、動力は字のごとく「電気」のみになる。電気自動車は1832年の段階で初めて開発され、ガソリン車よりも歴史は古い。しかし、1909年にガソリン自動車が逆転するにいたった。理由は、走行距離である。歴史も古く、環境にやさしい電気自動車がガソリン車より親しまれていたが、1909年にガソリン車の進歩がみられ、走行距離が飛躍したのが原因である。そのような歴史のある電気自動車であるが、今日、技術進歩とともに再び姿を現した。しかし、今現在でも課題は残されている。それは、大きくわけて「航続距離」「充電時間」「電池の種類の問題」である。排出ガスを全く出さない自動車として代表的な電気自動車であり将来の最終目標でもあるといえるので、技術進展が望まれる。

将来このような「エコカー」の普及のために、燃料の多様化、インフラの向上、低価格化が普及への課題だと言える。また、消費者には環境を意識した、自動車ライフスタイルの選択が求められるだろう。

2. 部会・分科会での討論内容

エコカーをテーマとして取り上げ、エコカーの定義から問題点・普及への課題を、さまざまなエコカーについて調べ発表した。

3. ゼミナール大会で学んだこと

さまざまなエコカーについて焦点をあて、グループ全員で課題研究をしていくことができた。時間配分や、選択ミスもあり、発表予定文章を全部紹介できなかったのが反省点だった。

松浦ゼミA班（岩城、岩崎、森、新開、黒川）

研究テーマ 「なでしこジャパンの経済効果」

1. 報告論文の要旨

なでこのテーマを調べようかと思ったのか。それは、ワールドカップの優勝により、波に乗る女子サッカーを、経済の面から研究することで、日本のスポーツ界に目を向けてみようと考えたからである。なでしこジャパンは日本に与える経済効果は1兆超えではないかといわれている。経済効果を生み出す簡単なプロセスとしては、グッズやユニフォームが売れるようになり、グッズを生産している工場が忙しくなる。そして、生産に必要な材料の新たな調達が必要になるという流れで動く。男子サッカーとの比較では、視聴率や観客動員数を例に挙げた。そして、ロンドンオリンピックについても男子・女子サッカーとを比較し、なでしこジャパンの経済効果の伸び率を示した。研究して、スポーツイベントの盛り上がりによる消費は、周囲へと波及していき、非常に効果的なものになることがわかった。

2. 部会・分科会での討論内容

私たちの班テーマに対する質問として、サッカーくじ（TOTO）は賭博にならないのか、地域に対する経済効果はあるのかなどがあった。前者の質問についての回答として、正式にはTOTO「スポーツ振興くじ」といい、文部科学省の指導監督のもと独立行政法人日本スポーツ振興センターにより運営・発売が行われている。スポーツ振興投票の実施等に関する法律に基づいているので合法である。しかし、賭博ではないと完全に否定することはできない。地域に対する経済効果としては、愛媛FCを研究発表内で取り上げた。経済効果は約5億円、雇用効果57人、税収効果は年間約800万円、これまでのスタジアム改修による効果は約7億円となっている。知名度・イメージアップの効果として、地域の知名度向上や地域の一体感として、チームの応援を通じた地域の一体感・地域への誇りの醸成についても効果を持っている。

3. ゼミナール大会で学んだこと

研究内容のまとめ方の難しさ、これが今回のゼミナール大会で最も学んだことである。私たちの班は各章で分担し作成した。自分たち的にはなかなかいいものが出来たと思っていた。しかし、いざ担当教員に見せて指摘を頂くと、本当に私たちの言いたいことは何かなど、根本を考えさせられた。このことからいかに聞いてくれる人にわかりやすく、興味を持てる内容にするかを深く考えることができた。もう少し時間をかけて作成できれば、もっと良い研究が出来たのではないかと考える。

次にゼミ大会当日についてである。各班さまざまなテーマで発表を行った。自分たちの班の内容はサッカーということもあり、興味を持ってもらいやすかった。しかし、この中でも最も関心を持ったのが宮本ゼミの班である。この班はわかりやすく、イラストや色を織り交ぜパワーポイントを作成しており、とても内容の把握がしやすかった。このようにしたらより伝えられたのにと、他の班を見て、自分の班の発表を反省することもできた。

今回のゼミナール大会の経験は卒論や就職活動などにも生かしていきたいと思う。本当に良い経験をしたと私は思う。

テーマ「『坂の上の雲』が松山市に与えた経済効果」

1. 報告論文の要旨

私たちは、自分たちの住んでいる松山市で取り組まれている「『坂の上の雲』のまちづくり」が実際どのような結果が出ているのかに興味を持ち、『坂の上の雲』が松山市にどのような影響を与えたのかをテーマにして発表した。

全5章にまとめ、第1章では、『坂の上の雲』のあらすじを、秋山真之ら3人の主人公の紹介を交えることで『坂の上の雲』を読んだことのない人にも、どのようなストーリーかを理解してもらえるようにまとめた。第2章では、坂の上の雲ミュージアムの職員の方に実際にお話を聞かせてもらい、それに加えてインターネットで『坂の上の雲』関連施設のHPなどから情報を集めた。それを元に「『坂の上の雲』のまちづくり」以前の松山市の観光資源や、本題となる坂の上の雲フィールドミュージアム構想について説明した。第3章では、坂の上の雲ミュージアムで入手した資料から、実際どの程度効果が出ているかについて表にまとめたものと、事前に50名の松山市出身者に『坂の上の雲』がどれくらい認識されているかを調査するためにアンケートを実施し、その結果からグラフを作成した。第4章では、テレビドラマ『坂の上の雲』の放映が終わった今、これからも観光客を誘致していくために松山市がどのような取り組みをしているかについて紹介した。第5章では、第1章から第4章までをまとめ、『坂の上の雲』のまちづくりはあまり大きな経済効果には至らなかったという結論と、これから松山市はどうしていくべきかについての私たちの意見を述べた。

2. 部会での討論内容

質問状の内容は明確な数字が少ないという意見が多く、質疑応答の時間に答えるのではなく、発表内容に新たに調べてきた愛媛県内経済への波及効果の試算など具体的な数字を加えることにした。5分という時間制限があったため、残る質問から「坂の上の雲ミュージアムができたことでこれまでの観光施設の客数の増減はあったのか」と、「新たな松山市のシンボルとはどのようなものか」の2点について回答した。

3. ゼミナール大会で学んだこと

題材が松山市のことということもあり、松山市の経済状況や市がどのような取り組みを行っているかについて理解できた。用紙20枚にも及ぶ長文を初めて作成したので、研究内容をまとめることの難しさが分かった。分からないことや調べたいことがあるとすぐにネットや本の情報に頼りがちだが、直接聞いてみなければ分からないこともあるということも学んだ。これらの経験を卒業論文に活かしたいと思う。

「消費税を増税するべきか」

宮本ゼミD 班代表 川又錠

1. 報告論文の要旨

消費税増税法案が可決され、増税されることが決定した。私たちは、政府の言う「社会 保障費の確保、財政の健全化」のための今回の増税が、果たして正しいものだったのか疑問を持ち、このテーマを選択した。

過去の事例として1997年の橋本政権による消費税増税では、公共投資削減と社会保障医療費の国民負担を増やすことを同時に行ったため、三大税が4兆円の減収となった。当時の日本経済はバブル崩壊後のデフレーションから完全に脱却しておらず、その点においては今の日本も同じである。よって、今の日本の状態で国民の負担を増やす増税という手段をとることは結果として減収を招くのではないかと考え、増税に反対の意見を持った。

しかし、少子高齢化が進む日本では、社会保障費は年間1兆円ペースで増え続けている。それだけでなく、デフレーションから脱却するための景気対策として積極的に行われてきた公共投資などが、赤字国債の発行を促進し、その償還費が財政を圧迫している。日本は世界の中でも最悪水準の財政赤字国であり、これらの問題を放置することもできない。

そこで増税をすることは決まっているため、その増税して得られた税収を、ただ社会保障費に充てるだけではなく、デフレーションから脱却するために使うべきだと私たちは考えた税収の仕組みから考えても名目GDPが成長すれば税率が一定でも税収が増える。実質GDPにインフレ率を掛け合わせたものが名目GDPであることから、デフレーションの脱却が必要であることが分かる。

日本銀行が行っているインフレターゲットも、なかなか効果が表れておらず、デフレ対策としてもっと他に出来ることはないのかと考えたところ、大きく2つの意見が出た。

1つ目は雇用対策である。若年労働者の完全失業率は年齢計を上回っていた。こうした人たちが働ける場所を提供することで、消費をする人が増えることからデフレーションの解消につながるのではないかと考えた。具体的には、給与の安さから人手不足となっている介護の分野に雇用の創出が可能ではないかと提案した。

2つ目は需要の創出である。東日本大震災を受けて国民の「安全・エコ」に対する意識が高くなっている。つまり、安全やエコに対する需要は高いということであると考えた。よって、安全やエコに対する分野への支援をすることで新たなモノやサービスを開発させる。需要のあるものであることからそれらは消費される。こうしてデフレーションの解消につながるのではないかと考えた。

2. 部会・分科会での討論内容 質疑応答の時間では特に質問もなく、用意してきたそれぞれのプレゼンテーションを披露するだけに終わった。発表においては原稿を読む班が多かった。

3. ゼミナール大会で学んだこと 大学で学んでいる全てのことが、今回の発表に繋がっていた。理論を習うだけで面白くない勉強が、現在の経済問題に応用できたことが興味深かったし、勉強に対する取り組み方も変わった。また班員と協力して取り組んだことで結束も深まったし、それぞれの役割をしっかりと果たすことで責任感も身についたように思う。長いようで短い期間を協力して、発表という舞台を終えたことで達成感も得られた。この経験は今後にも活かされると思う。

報告書

安田ゼミ C 班

1. 報告論文の要旨

報告論文は私たちがテーマとしているスマートフォンの社会的影響について調べた。社会的影響の中でも、私たちはスマートフォンの悪い影響について調べた。内容は、スマートフォンの特徴、スマートフォンとガラパゴス携帯の違い、ウイルスによるスマートフォンの影響、個人情報の流出についてまとめた。私たちが、メインのテーマとしていた、ウイルスによるスマートフォンの影響は、ガラパゴス携帯が主に使われていたときは、起こることが少なかったウイルスの影響を報告した。なぜスマートフォンがウイルスに感染するのか。どういったウイルスの種類があるのか、ウイルスの感染を防ぐにはどういったことに注意すれば良いか調べた。

もうひとつのメインテーマとしていた、個人情報の流出は、実際に起こった個人情報の流出の事件、アプリからの流出の例では、どのようなアプリから流出したのか。どう行ったことに気をつければよいのか。そして今後起こる可能性のある、大規模な個人情報の流出 (LINE, Facebook)。実際にブラックマーケットで売買されている個人情報についてまとめた。

2. 部会・分科会での討論内容

部会・分科会では、論文で書いた内容を簡潔にして、パワーポイントにまとめた内容を使って部会に参加した。部会・分科会での発表は練習不足が出て、時間内に全て発表することができなかった。自分たちの甘さが出てしまった。しかし、まとめた内容はプロジェクターを通して見やすいプレゼンテーションができた。

3. ゼミナール大会で学んだこと

今までに研究テーマを作り、調べてゼミナール内で発表することはあったが、ゼミナール大会のような規模での発表は今回が初めてだったので、緊張した一方でワクワクしていた。

内容も今までやった研究発表よりも内容が濃く、まとめるのは大変だった。今まで大勢の前で話す機会はほとんどなかったので、前で話すときにどうすれば、聞いている人に興味を持ってもらえるのか。どういう話し方をすれば聞き手に伝わりやすい発表になるのか。今までは考えたことがなかったけれど今回のゼミナール大会でそういったテクニックも同時に学べることができた。発表では、間を持った話し方や、聞き手のレジュメをめくるはやすさに注意してゆっくりと進めたが、それでは時間内に終わらせることができなかった。このようなことは、実際の発表の場所でないと学ぶことはできなかったことである。結果として、良い発表の仕方であったかどうかは分からないが、同じ教室で発表した人の中で、引きつけられる話し方をしている人が実際にいた。そのような人を超えられるように、努力をして今後大学の中で発表する機会はないかもしれないけど、社会に出た際に私たちも人を魅了できる話し方を身につけることができれば強みになると感じた。一人では、完成することができなかったけれども、同じ班の人たちの協力のおかげで何とか完成することができた、大学に入って基本的に個人での活動が多かったため、グループ活動をするのは少なかったもので、一人なら辛い経験が楽しい経験になった。今後この経験を社会でも活かせることができるように精進していきたい。

1. 報告論文の要旨

脱原発に向けたプロセスと課題というテーマで研究しました。まず、東日本大震災に伴って起きた、福島原発の事故について知るため、事故によって起きた被害、影響などについて詳細に調べました。事故がもたらした被害、そこから考えられる原発のリスクを考察し、班としての意見は、原発反対ということで、一致しました。

最初に、原発賛成派の意見を調べ、自分たちの意見と照らし合わせました。結果、賛成ではあっても、ほかに解決策がないために消極的に賛成するという意見が多数であることが分かりました。また、原発を取り巻く「原子力村」の固い繋がりが及ぼす悪影響、経済が発達していない地域を交付金漬けにし、原発を必要とさせてしまう「電源三法交付金」について知り、まだまだ日本では脱原発を目指すことは難しいという現状を知ることができました。

第二に、原発に反対している人の考えについて調べ、原発を稼働させていく上でどのようなデメリットがあるのかということについて理解を深めました。使用済み核燃料の処理に関する問題が未解決であり、社会的認知が不十分であるということが問題点です。また、原発を停止すると本当に電力不足に陥るのかという観点から調査した結果、原発がなくても火力・水力発電で全ての電力を賄えるという事実も分かりました。

第三に、2030年までの原発について政党の考えを調べました。どの政党でも共通していたことは、過程は違えど、方向性としては原発縮小を目指しているようです。更に、原発の代わりとして、再生可能エネルギーが注目されていることが分かりました。しかし、現実的に電力を補うことは難しいようです。

最後に、私たちが住む愛媛県に設置されている伊方原発について調べました。福島原発の事故を受けて、伊方原発で行っている災害対策について詳細に調査しました。また、過去に伊方原発に対して起きた原発訴訟に関しても調査し、国の原発に対する安全対策のずさんさを知りました。伊方原発は活断層からごく近い距離に設置されているので、もし、大地震が起きた時に、現在の国の対策では不十分ではないのかという意見を持ちました。

3. ゼミナール大会で学んだこと

グループで1つのテーマにそって研究を進める中で、全員の集めた情報の整合性をとることや、意見を統一していくことの難しさを実感しました。

また、自分たちの調べたことをプレゼンテーションすることの難しさを学びました。計画的に班として動いていれば、もっとうまく簡潔に自分たちの考えを伝えられたと思います。限られた時間で効率的に発表することができなければ、いくら準備しても、良いものにならないと痛感しました。

1. 報告論文の趣旨

松浦ゼミ B 班の研究テーマはユーロ危機であった。このテーマを選んだ動機としては、そもそもユーロ危機など一連の危機は単純に EU 内だけの問題ではない。さらには国家間だけの問題でもなく国民単位で影響を与える。しかしながら具体的にどのような形で影響が出るのかがわかりづらい。そこで、今回の一連の危機を研究することで最終的に私たちにどのような影響が出るのかを掴みたいと考えたためである。そのために私たちは EU の現状、ギリシャ危機、ユーロ危機について調べていき、最終的にギリシャ危機以外の諸原因やユーロ圏への影響、日本や私たち日本人への影響を研究していった。

2. 部会・分科会での討論内容

結論から述べると部会内では事前に預っていた質問とその回答は行われたが討論は行われなかった。ゼミナール大会中に討論まで発展しなかったのではなく事前に討論は行わないという旨の連絡が回っていたためである。討論を行わない代わりとしてプレゼンテーションの時間を延長して報告会が行われた。

3. ゼミナール大会で学んだこと

今回のゼミナール大会で学んだことは「情報の共有化をいかにして図るか」「人員の適切かつ効果的な役割分担の仕方」「組織化における個々人の能力や技術の価値」の 3 点である。松浦ゼミ B 班では当初から「それぞれに予定があり準備を行える機会と時間が極端に限られている」「全体的に能力や技能が乏しい」という 2 点の大きな問題が発生していた。つまり、そもそも班員が集合して作業できる時間が少なく、集合できたとしても進度は遅くまた質も決して高いとは言えず、さらにはその日どれだけ何をやったかという情報の共有も不十分なために次回の準備に支障をきたしてさらに進度が遅れるという事態が起こったのである。そこで私はそれらの問題を改善すべく「どうすれば短い時間で諸々の製作物を完成させることができるか」について思案を巡らせることになった。その解決策として私は Skype などの操作が簡単なソフトウェアを活用した。また班員の日程だけでなく能力面や技能面を独自にチェックすることで「誰に何がどれくらいできるか」を把握して仕事を割り振ることにした。しかしながら Skype の使い方がわからない班員やそもそもパソコンなどをあまり利用しないという班員がいたなどの事情から Skype は上手く活用することができなかった。また割り振った仕事に対する成果の質について着目した時、決して十分だと言えるものばかりではなかった。完成させることはできたが制作方法や製作物に関しては質が高いとは言い難い。原因としては当初からの問題点に加えて自分の洞察不足と役割分担のミスも挙げられる。これらの失敗経験から私は「情報の共有化をいかにして図るか」「人員の適切かつ効果的な役割分担の仕方」「組織化における個々人の能力や技術の価値」という 3 点の難しさと同時に重要性について、学ぶというよりは学ばされるという結果に終わった。今回のゼミナール大会とそれに向けた活動で手痛い経験を味わう羽目になったが、社会人としてこれからより自身の能力を発揮して組織に貢献することが求められるにあたって上記の教訓を学ぶことができたことが今回のゼミナール大会の最大の収穫であった。

1. 報告論文の要旨

我々は、服を着るという行為が当たり前の世界で生活しており、この意味ではファッションについては2種類の人間に分類することができる。それはファッションに興味がある人間と、ファッションに興味がない人間である。我々はその中でもファッションに興味がある人間に着目し研究テーマとすることにした。

この研究をしていく上で、我々はファッションに重点をおいた。その中で多くの疑問点が浮かび上がってきた。女性に比べファッション誌の少ない男性はどこから情報を得ているのか、現時点でのスポーツの有無によって服装に対する意識に差があるのか、デートする時と友達と遊ぶ時の服装に差があるのかということである。

過去の多くの論文では女性がおしゃれという前提で調査・分析されており、男性のファッションについて書かれている論文はあまりなかった。そこで過去の論文から得られなかった男性のファッションに対する意識を追加的に調査することで、男性と女性とでどちらがファッションに興味があるのかということ結論付けることにした。

以上のことを調査するために、松山大学の三回生を対象に質問紙調査を行い、分析をした。主な結果は、情報源では男女ともに、雑誌やブログから情報を得ていた。服装では女性は低価格で多くの組み合わせを楽しむが男性は定番の服装を好むという結果が出た。男女どちらがおしゃれなのかという質問では、男女とも女性がおしゃれという回答だった。

2. 主な質問

- ・髪型とファッションの関連性について
- ・恋をしている定義について
- ・アクセサリーを含めた場合の結果の予想について

3. ゼミナール大会で学んだこと

前期にアンケート作成、配布、回収を行い、夏期休暇中に集計をしていき、後期に考察を考えた。我々が在籍する熊谷ゼミは、部活動を行なっている学生が多かったため、夏季休暇中もなかなか集まれず、全員で取り組むことが困難だった。そのため、ゼミ内で情報共有し、実際に発表するために、どうすれば簡潔に分かりやすく伝えることができるのか、グループ全員で役割を分担し何ができるかを考えた。そして、出来上がったものをゼミの時間に持ちよることで情報共有の大切さ、スケジュール通りに課題に取り組むことの大切さを学ぶことが出来た。

・報告論文の要旨

テーマ「インターネットの利用方法が社会にもたらした影響を考える」

私たちは「インターネットの利用方法が社会にもたらした影響を考える」をテーマに、三章に分けて研究・発表を行った。

まず、第一章 第一節「スマートフォン・タブレットの普及が社会にもたらした影響を考える」では、近年注目されている電子書籍の現状、メリット、課題について調べた。現状としては、書店数の減少に伴い、電子書籍市場が拡大されているのが現状で、今後もスマートフォン・タブレット端末の普及による電子書籍市場は拡大されるだろう。第二節「ソーシャルメディアが社会にもたらした影響を考える」では、FaceBook、Twittre などの SNS による社会的影響、役割について調べた。特に、東日本大震災の際に SNS は重要な役割を担った。震災後の人々を支えた「Personfinder」は消息情報を確認・検索できるサイトで、多くの人々が利用した。今後も SNS による情報は人々の生活、社会になくてはならないものになるのではないだろうか。第三節「ソーシャルゲームがゲーム業界にもたらした影響について考える」では、グリーやモバゲーなどのソーシャルゲームの市場状態、今後の傾向について調べた。スマートフォン・タブレット端末の普及により、どこでもゲームを楽しめるようになってきた。今後もスマートフォン・タブレット端末の普及により、さらなる成長が見込まれると考える。

次に、第二章「ネットフリックス等のネット配信がテレビ・映像業界にもたらす影響を考える」では、近年のテレビ業界、ネット配信の動向、現状と課題について調べた。インターネットの普及により、テレビを視聴する時間が減少した。そこで、Hulu やネットフリックスなどのインターネットを活用したビジネスが誕生。今後はこれらを内蔵したスマートテレビが主流になるのではないかと考える。

第三章「ネット注文と宅配がスーパー業界にもたらした影響を考える」では、ネットスーパーの形態、業種別の動向、現状について調べた。現在では、イトーヨーカドーやイオンなどもネットスーパーを導入し、年々売上を伸ばしている。また、少子高齢化により、高齢者や身体障害者が多く利用し規模を拡大していくことが予想される。

・ゼミ大会で学んだこと

今回のゼミ大会は、各ゼミ・班が違った内容を研究し、どれも興味深いものばかりでした。その中でも、熊谷ゼミの、「ファッションに対する嗜好の差に関する研究」が非常に興味深い内容でした。発表では、アンケート調査を行ったデータを分析し、発表したものだったため、私自身が「なるほど。」とうなずける内容で、最近の大学生の嗜好を知ることができました。

ゼミ大会で学んだことは、今後の大学生活、就職活動でも大いに役立ち、また、知っておくべき内容だったと思います。私たちの取り組んだ内容、そして各班の発表内容を今後に活かしていきたいと思っています。

1、報告内容の趣旨

題名、通貨危機～ブラジル・アジア通貨危機から見たEUのこれから～

第1章、 変動相場制と固定相場制

第2章、 通貨危機とは

第3章、 EUの通貨危機

第4章、 ブラジルの通貨危機

第5章、 アジア通貨危機

第6章、 今後の解決策

2、部会・分科会での討論内容

解決策に挙げた①為替レートの固定性、②金融政策の独立性の確保、③自由な資本移動を同時に満たすことが不可能とあるが、それはなぜか。

なぜ上記の条件3つのうち1つを諦めなければならないのか。

なぜ1章で固定相場制と変動相場制の説明を扱っているのか。

3、ゼミナール大会で学んだこと

私たちは、このゼミナール大会でなにか1つの目標に向かって努力するという大切さを学びました。夏季休暇中からの資料収集や、論文、PP、レジュメ作成など手間と時間のかかる大変な作業を、一人一人が努力し、その後同じ班の仲間と協力し合って完成に近づけていきました。就職活動が始まった今、そして就職した後にとってもこのような努力した経験が大いに役立ってくると思います。長丁場の就職活動において、目標に向かって周りのみんなとも協力し合って努力することが、厳しい就職活動を乗り切るうえで欠かせないことだと思います。

就職した後でも、報告書などの期限付きのやらなければならないことが多くあるはずです。就職前、就職活動前にこのような貴重な体験ができてよかったと思います。

この貴重な体験と努力を忘れず、今後役に立ってほしいと思います。

消費税増税には反対である

松浦ゼミ C 班 代表 松島真実

1、報告論文の趣旨

今回私たちが消費税増税問題に対してなぜ反対意見を述べるかという、消費税は私たちの生活で最も身近である税だからである。私たちが日常生活で消費行動をする際、年齢身分にかかわらず常に身にまとうものであり、また、販売をする側も消費税分を付加して価格設定をする。消費者だけでなく供給者側も影響を受けるいわゆる国民一体型の税である。そして、今まさにその消費税税率が引き上げられようとしている。世間では増税に反対しているが、仕方ないとみなしているという人が多いのではないだろうか。そこで、私たちも反対意見ではあるが、消費税について知識を深め、理解してから反対意見を述べていきたいと思う。

第 1 章では、消費税の歴史について少し触れ、それから消費税は高齢化社会のための税制ではなく、世代間の不公平をなくすための税制である、「消費税の本来の目的」を述べ、その消費税が何に使われているかというのを表しました。

第 2 章では、主に日本の消費税の特徴として、①低税率であること、②インボイス方式をとっていないことについて述べ、また各政党の反応も記しています。

第 3 章では、日本が抱えている問題として、①逆進性の極み、②中小企業への影響、③医療崩壊、④震災による影響、について論じました。

そして、第 4 章のまとめでは、反対の理由として、①増税は逆進性の進行につながる、②増税で国の収入は増えるのか、③疲弊している経済の下増税はますます経済は停滞するのではないか、ということ挙げています。

2、部会・分科会での討論内容

発表後の質疑応答に関しては、5 分という短い時間の中で事前にいただいていた質問の約 30 個のうち厳選して 3 つだけ解答させていただきました。また、最後の 20 分間で総括質疑を行い、私たちのグループに 1 つだけ質問が寄せられました。予想外の質問への回答に時間がかかってしまったのは今回の反省点です。

3、ゼミナール大会で学んだこと

まず、自分たちのテーマについての詰めが甘すぎたことを痛感しました。テーマを決める際に、もう少しテーマを選ぶ理由、到達点を明確にしてチーム内で共有できれば軸もぶれずにスムーズに進めたと思います。また、週に一度ゼミの時間とは別にみんなで集まって情報共有をしたり、役割分担をして各々作業を行っていましたが、やはり個人の負担に差がでてきてしまいました。私個人としては、主に論文のまとめ方について学びました。また、論文作成やパワーポイント作成を通して、技術面の他にチームメンバーのとの協力を実感することができました。

○発表内容

私たちは、食文化について調べ、特に最近人気が出つつある B 級グルメによる地域活性化について調べました。B 級グルメの歴史や各地域にはどのような B 級グルメがあるのか、そして、B-1 グランプリの経済効果などについて調べました。

実際に自分たちの足で調査することが大切だと思ったので、今治の B 級グルメである「焼豚卵飯」で有名な白龍というお店に行き、インタビューを行いました。

さらに、今年の B-1 グランプリが福岡県の小倉であったので、小倉まで班のメンバーで行き、B-1 グランプリがどれくらい盛り上がっているのかを体感しに行きました。

これからの B 級グルメによる地域活性化に必要なことは、その地域の住民と、役所の人などの、地域にいる人全員の協力無くしては持続的な地域活性は難しいと考えました。

○感想、反省

最初の 2 万字のレポートを作成するとき、それぞれ 5 0 0 0 字くらいに分担して作成していったけど、最終的にその内容をあわせるとなると、内容が似ている部分があり、そこを省略していると、字数が全然足りなくなったりして大変でした。

発表するときもどれくらいの量で 1 5 分きっちりに終わることができるのか、最初は 2 5 分くらいかかって愕然としたけど、それからかなり発表原稿をみんなで考え、練習し、自分で言うのも恥ずかしいけど、なかなかいいものができたと思います。大人数の前でプレゼンできたのはとてもいい経験になりました。

反省点は、発表の前日まで PowerPoint を手直ししていてなんとか間に合い印刷もできて完璧だと思っていたけど、発表が終わって、質問の時に私たちの班に質問があり、それにうまく答えることができなかつたことです。事前にどのような質問がくるのか大体考えて、それに対する答えも考えておくべきだったと思います。もっと早く作業に取り掛かり、余裕をもってやれば、できていたと思います。次回こういう機会があれば完璧にできるようにやりたいです。

1. 論文の要約

東日本大震災で多大な被害を被った東北地方のみならず、日本全土における産業被害の影響、震災からの復興、さらに原子力発電のあり方などをも考えたく、「震災による東北の産業被害と復興」というテーマで論文を書いたのである。そして、上記のようなことを調べていくと、大きく被害を受けたのは、東北地方が主な部品の産地である製造業とりわけITや自動関連製造業であった。東北地域で部品が製造されないためにサプライチェーンに問題が生じ、全国的にIT産業や自動車産業は生産に大きな被害を受けざるを得なかった。さらに、東北地方の完全な復興にはとても長い時間がかかり、そのためには政府の補助や、国民の間接的な支援が欠かせない。なお、原子力発電についても、事故がこれだけの被害を生んだということを踏まえたうえで、再稼働または廃炉を考えることが大事である。また、放射能に汚染された瓦礫の受け入れについても、被災した都道府県以外の自治体も受け入れていく方向性を打ち出すべきである。日本経済の低迷に拍車をかけた今回の被災であったが、見方を変えれば新しい日本へと変えていくきっかけともなりうると感じた。

2. 大会での先方とのやり方

部会長から全般的な指示を受けながら、事前の打ち合わせとして先方と、論文の交換や意見交換などを行った。発表資料や発表の仕方など詳しいことは部会長がすべて連絡し、わからないことがあれば部会長に各自で連絡し尋ね、各班でそれぞれリハーサルを行い発表当日に備えた。発表当日は、準備したパワーポイントをパソコンに移し、全6班がそれぞれの報告や質疑をするなど、活発な討論が行われたと思う。

3. 大会から学んだこと

今回の大会で、論文の構成の方法や、どのように課題について調べていくか、論文として書くときの字体など、知らないことが多くあり、今後の活動に新しく知識をつけることができた。とりわけ、発表のスライド作成などについても、アニメーションの活用、発表の受け手の見やすさや、理解のしやすさなど、作成に当たって学んだものが多くて良い経験となった。

発表時、パワーポイントと資料を関連付けて、前を見て堂々と発表できるような工夫を凝らすことができればもっと良い発表ができたのではないかと思う。大会準備で様々なことを調べていくことで、今まで知らなかったことや、間違った知識の正確な理解を通じて自分の意見を持つことができたのは収穫であった。また、期限ぎりぎりになるのではなく、事前に準備していくことが大切だと改めてわかった。今後も、学んだ多くのことを忘れることなくしっかり活かしていきたい。

テーマ「ユーロ危機 ～ギリシャとスペイン～」

谷口ゼミB班 代表 越智 真直

1. 報告論文の要旨

私たちは、この数年よく耳にするようになったユーロ危機について興味を持ち、その中でもとりわけ危険だと思われるギリシャとスペインを中心に、ユーロ危機の全体像の把握、及び現状と今後の在り方について研究した。

はじめに、ユーロ誕生までの経緯や、ユーロという共通通貨を導入することで生じるメリット、デメリットについて説明した。メリットは、固定相場制になり為替リスクがなくなることや、ヘッジファンドからの通貨操作を防げることである。デメリットは、一国で金利操作ができなくなることや、金利の差がなくなり国ごとに損得が生じることである。

次に、ユーロ危機について、危機の始まりやユーロ全体での影響について説明した。リーマンショックの影響、ギリシャをはじめとする南欧の財政不安やスペインのバブル崩壊、そして固定相場制の欠陥がユーロ危機の発端といえる。また、スペインのバブルの放置、無意味なストレステストなど、各国の対応の悪さも危機につながった。ほかに失業率の問題にも触れ、国の財政への悪影響があることを述べ、それに対する対策などを説明した。

次に、ギリシャ危機とスペイン危機について詳しく説明した。ギリシャでは財政赤字の粉飾が発覚し、国債が下落する。結果、この国債を保有する金融機関の経営が悪化し、為替相場も下落を始めた。また、EUやIMFの支援を受けるも、経済の回復の兆しは見えていない。さらに、ユーロ離脱の可能性が示唆されたギリシャ総選挙についても触れた。スペインでは、中央銀行がバブル崩壊の危険性を主張するも、政府はこれを放置した。後にサブプライムローン問題の影響を受けバブルが崩壊し、スペイン各地で不況に突入していった。その後、失業対策や、支援を受け入れる上での緊縮政策の内容を説明した。

最後に、ユーロ危機の全体像をまとめ、私たちの考える今後のユーロのあり方や、現在の負のスパイラルを断ち切るための具体策を提案した。それは思い切って緩和政策をすることである。

2. 部会での討論内容

他班からの質問のすべてには答えられなかったが、発表の補足になるバブルへの対策や、ギリシャの脱税対策、ドイツの失業率についての質問を選び、十分に説明できたと思う。

3. ゼミナール大会で学んだこと

私たちがゼミ大会で学んだことは2つある。まず1つ目は、ユーロ危機に関する知識、とりわけギリシャとスペインについて知ることができたことだ。これまでもユーロ危機、スペイン危機などニュースで聞くことは多かったが、これを詳しく調べる機会は、ゼミ大会がなければ持てなかった。そして、今まで自分が理解していると思っていたことが間違っていたり、知らなかったりしたことが出てきた。まだまだ知らないことも多いが、確実に知識を深めることができた。2つ目は、人に伝えることの難しさだ。自分たちは理解していても、それを時間内に分かりやすく人に伝えるということは、非常に難しいことだと分かった。パワーポイントをうまく利用することも大切だと分かった。アニメーションなどをうまく利用すれば、時間を節約し、自分たちの伝えたい部分を強調することができる。

ゼミナール大会報告書

入江ゼミ C 班 代表 久原潤一

1. 報告論文の要旨

福島第一原発事故が発生して以来、脱原発を支持する声が多くなってきた。脱原発をすすめると、現在原発が占めている約 3 割の電力を他の発電方法でまかなわなければいけない。また、地球温暖化や異常気象などの問題に対策を行う必要が出てきた。そこで利用すべきなのが再生可能エネルギーであり、今回再生可能エネルギーの現状と課題をテーマとした。

再生可能エネルギーとは、一度利用しても比較的短時間に再生可能で、資源が枯渇しないエネルギーのことである。今回は再生可能エネルギーの中で太陽光発電と洋上風力発電を取り上げ、それぞれのメリットとデメリットを取り上げた。その他には、固定価格買い取り制度とスマートグリッドと二重サッシとダブルスキンなど省エネルギー技術である ZEB について取り上げた。固定価格買い取り制度とは、再生可能エネルギーによって発電した電力を電力会社が買い取ることを義務づける制度である。この制度は再生可能エネルギーを育て、国産エネルギーのエネルギー自給率を上昇させること、CO₂ 削減による地球温暖化防止などを目的としている。スマートグリッドとは、IT を利用して効率的に電力を利用するための技術のことである。スマートグリッドによって充電インフラを充実させることや、IT 技術を利用して地域ごとの発電量を把握して発電量の多い地域から少ない地域に電力を送ることが可能になる。よって、再生可能エネルギーの利便性を向上させ普及を促進することが可能となる。

現在、再生可能エネルギーは未だ課題を多く抱えている。しかし、今後必要不可欠なエネルギーであり普及させる必要がある。政策の面では補助金を充実させて導入を容易にすることや技術開発を進め、発電コストの引き下げや発電量の安定化などの課題も解決する必要がある。今後、私たち国民も再生可能エネルギーに対する関心を持ち、できる限り普及に協力する必要がある。

2. 部会・分科会での討論内容

第 5 部会では配布資料とパワーポイントを用いて報告を行った。報告内容は再生可能エネルギーの現状と課題についてである。時間内に収まるように論文の重要な点を取り上げて要約し、報告を行った。

3. ゼミナール大会で学んだこと

集めた資料を、15 分以内で再生可能エネルギーを知らない人に分かりやすく要約して伝えなければならないことはとても大変だった。予想以上に要約することに時間を消費してしまい、準備段階で手間取ったことは今回の反省点である。今後このような機会があれば、計画的に準備を進め、より良い報告ができるよう努力したい。

松本ゼミ 現代ファイナンス理論の応用としての地元企業研究

1. 報告論文

ご当地ファンドとは、地域密着型の投資信託のことを言い、愛媛県に縁のある銘柄を対象としてポートフォリオを組み、愛媛のご当地ファンドとして最適ポートフォリオを作成した。ただし単なるポートフォリオの算出ではなく、その後得られた結果をより分析し、組み入れ比率の解積までを行った。以上により最適ポートフォリオについての考察を深めることができた。

2. 討論内容

・ポートフォリオ理論を使えばみんなが儲けることができるのではないか

→ポートフォリオ理論を用いて最適銘柄を選択し、リスクを低下させることに成功しても、あくまでも低下させただけで、リスクは完全にゼロにはならないので、損失を発生する可能性はある。なので、ポートフォリオ理論を用いたとしても、必ずしも儲かるとは限らない。

・ポートフォリオ採用銘柄の決定方法

→ご当地ファンド全 50 銘柄の株価データをエクセルでデータ化し、株価変化率から、各銘柄間の連動性を前提にシミュレーションを行い、そのなかで、リスクが最小化となる最適ポートフォリオの組み合わせおよび、組み入れ比率を決定。

3. 学んだこと

まず、愛媛県内に本社機能を有する企業を 50 銘柄選び、それらの株価データを基にシミュレーションによりポートフォリオ採用銘柄を決定した。以上の分析を踏まえ、①論文作成、②スライドの作成、③質問状の作成④発表原稿の作成を行った。これらの過程で大変だったことは、①論文を作成する際にポートフォリオ理論を理解し、それをご当地ファンドに用いる応用という一連の作業、②スライドの作成及び発表原稿作成では、論文の中での要点を、知らない学生たちに理解してもらえるように工夫すること、③質問状の作成では、各ゼミの論文を読み、それらを理解した上で疑問点を見つけ出すことである。これらは、全体で共有し意見を出し合って改善していった。さらに、当事者意識や責任感を持たせるために、役割分担をしたが、個人の能力の差によって仕事量に差が生じ、結果的に負担が一部に偏った。このため、フリーライダー（他人の努力にただ乗りすること）問題が起こった。この問題は個々人の能力の差があるために、解決するのは難しい。均等に分担しようとするれば、作業全体が遅くなってしまう。なので、各々の出来ることをそれぞれ出来る最大限の範囲で行うことが、全体の作業をはやく進めることにつながると考え、作業を進めることにした。分担したことにより発生したフリーライダー問題ではあるが、作業を全体で見た時、作業を行う人に対して能力の低い人も客観的な視点を述べることができたので、この役割分担は間違いではなかったといえる。なによりも、それぞれが当事者意識を持ち、各々の与えられた仕事を全うすることができた上に、他方で生じた問題にも当事者のように共有して、全体の統一感を持ち行動することで、チームワーク力を向上させることができた。今回はフリーライダー問題が発生した中でも作業を進めることにしましたが、本来ならフリーライダー問題は無視することのできない問題である。負担が偏るのみでなく、本人にとって技術が身に付かず、何よりも責任感が育たない。これからのゼミでの活動において、どうすればよいか、全体での各々での役割、全体での意識のあり方などを、このゼミナール大会で学んだ経験を活かし、ゼミ活動の中でもさらなる飛躍を目指して日々努力していきたい。

再生可能エネルギーを生かしたまちづくり ～地域資源である自然エネルギーの活用～

橋本ゼミ B 班

1. 研究テーマに選んだ理由

今世界的に大きく原発から自然エネルギーの転換を求めている。ヨーロッパを中心に国家規模で、原発からの回避と「再生可能エネルギー」中心の社会を実現しようという取り組みが進行している。これに対して日本は、自然エネルギーの準備を怠ってきた実態も反映し、今もなお原発からの回避へのためらいと自然エネルギーの頼りなさが指摘されている。しかし日本でもこの十年間で着実に準備や取り組みがなされている。それを紹介したいと思う。

～滝上町の取り組みについて～

農業・林業の町_滝上町

滝上町は北海道の北東、オホーツク管内の西部、渚滑川の上流部に位置する。人口は 3034 人（平成 23 年 10 月 31 日時点）という小さな町である。面積は 766.89km² を有し北見山脈の中にあって三方を山に囲まれ、その中央を天塩岳に源を發した渚滑川がサクルー川、オシラネツ川支流を集めて貫流し、紋別市渚滑町を経て、オホーツク海に注いでおり、この地域は農業適地になっている。

本町の気候は、オホーツク海の気象圏にあり、周囲を山脈にかこまれ、盆地特有の気象状況となる事が多い。このため夏は 30 度を超え冬にはマイナス 30 度となり、寒暖の差が著しい。また長雨のために冷涼な気候となって農作業に被害を与える事がある。

産業は農業・林業を基幹産業としており、農業は、酪農・畜産・畑作で構成され、耕畜の連携による土づくりを基本とした環境に配慮した農業を展開している。また、近年は、農業と林業の連携により製材工場から発生するオガ粉、さらには林地残材などを活用して、チップ・バーク（樹皮）を家畜敷料や堆肥化に向けて利用する事業を実施し、農林連携による地域内での資源循環利用の取り組みを展開している。

調べてみての感想・まとめ

町づくりは一つの産業だけが突出するよりも異業種がそれぞれ相互に関連しあって事業を進めていくことがよい。そのような町づくりが循環型社会における農村地域の役割を果たす一端だと考え、今後も様々な角度から地域の特性を生かした取り組みを行っていくべきだろう。豊富な森林資源を効果的に有効活用しながら持続する循環型社会の構築をしていくべきだ。

1. 報告論文の要旨

論文は、私たちがテーマとしているスティーブ・ジョブズから見た情報技術革命についてまとめた。情報技術革命について調べる事で、マウスやG U I、イーサネットなどといった、私達が日ごろから使っているコンピューターの技術の源流は、アップル社の元CEOのスティーブ・ジョブズやマイクロソフトのビル・ゲイツ達ではなく、アメリカの大手複写機メーカーのゼロックスが設立したパロアルト研究所が持っていたということを知った。しかし、このような技術を普及させ、商業的な成功を手にしたのは、スティーブ・ジョブズやビル・ゲイツ等の他の企業達で、技術を単独で持っていた筈のパロアルト研究所は商業的に見てみると大きな失敗をしていることがわかった。この事から、商業的な成功を手に入れる条件とは何か、何故パロアルト研究所が失敗したのかなどの疑問が出てきたので、パロアルト研究所から見た商業的な失敗例と、スティーブ・ジョブズから見た商業的な成功例とを比較していき、比較から分かった違いから、上に述べた、疑問に対する答えを考察していった。

2. 部会・分科会での討論内容

まず私達の班は、全体を学んだ後に、大まかなまとめをパワーポイントで作成していった。そして、そこからパワーポイントの中身で気になった語句や意味を更に追求していき、論文を制作した。発表の際には、台本を作ってしまうと、あまりにも味気がなさすぎる事、一方的に伝えるだけになってしまう等、多くの問題を感じた為に、自分で感じて、考えた事を生で伝えることを優先し、その場でパワーポイントを説明しながら言葉を紡いでいくという方法をとった。これが良かったのか、結果的には優秀賞を受賞する事も出来た。しかし、このような発表方法をとることによって、本番一発勝負での発表となった為か、発表者とパワーポイントを操作する人との連携をとる事が上手く出来なかった。これは、班員によっての情報量や理解度の違いから来ると考えられるので、班内での情報交換の甘さが出てしまう結果となった。

3. ゼミナール大会で学んだこと

自分たちの興味があることについて調べることが出来たので、其れなりに意欲を持って取り組むことが出来た。他のゼミの発表も非常に刺激的な内容も多く発表やパワーポイントの作成や、考え方の違いなどもあり、非常に楽しめる大会だったと思う。しかし、時間の調整や、情報の取捨選択が出来ていないような発表もあり、班によってかなりの差があったような気がした。団体での発表経験はあまりなかったので、そのような点でもいい経験になったと感じている。しかし、プレゼン方法や、資料の作成、さらに、内容の吟味など、改善しようと思えばまだまだ出来た筈なので、そういった所から自分自身の甘さや油断が浮き彫りになってしまうこととなり、そこは今後直さなければならない点であると感じている。班内での仕事量の分割が上手く出来ず、班員のそれぞれの個性を発表の中に取り込めなかった事も、大きな反省点といえるだろう。今回の大会で学んだ事を、今後の学生生活に活かせるよう努力したい。

1、報告論文の要旨

今後、日本企業はどこの国に進出していくのかというテーマのもと、経済成長が著しい ASEAN 諸国を比較、検討した。現在最も日本企業が進出している中国に関しては、賃金上昇、景気減速、尖閣諸島国有化による反日デモといったチャイナリスクが強まっているので対象外とした。比較項目として、各国のワーカー基本給（月額）、2000年から2012年における1人当たりの名目 GDP の伸び率、2000年から2012年の経済成長率の平均値の3つを比較した。その結果、すべての項目で1位だったミャンマーについてさらに詳しく検討した。海外進出をする時の課題・障害として法規制の違い、文化・商習慣の違いを挙げる企業が3割を超えている。その点でミャンマーはどうかを重点に置いて検討してみた。ミャンマーは、テイン・セイン大統領が就任してから民政移管し、経済改革を進んでいる。また、11月19日の日ミャンマー会議で日本政府は500億円規模の円借款を実施すると発表した。インフラ整備、貧困民族の生活水準の向上を図るなど先進国のなかでいち早く金融支援を表明し、日本企業のミャンマー進出を後押ししている。この点からも今後進出していく国はミャンマーであると私たちは確信した。

2、部会、分科会での討論内容

発表後の質疑はなかったが、以下は事前の質問内容である。

- ・国内市場の縮小はどのくらいの規模で進んでいるのか
- ・ミャンマーの課題をどう解決していけばいいか
- ・ミャンマーとの連携において他国に打ち勝っていくためにはどうすればいいか
- ・日本企業の脱中国は本当に可能なのか

3、ゼミナール大会で学んだこと

3年の前期からゼミナール大会の準備を始め、すべてが完成するのに11月末までかかった。班員は5人と多いにも関わらず、なかなか進まなかった。テーマ選択の段階から全員の意見が一致せず、それを決めるだけに多くの時間を費やしてしまった。全く価値観の違う5人が話し合いをスムーズに行うことは難しいと改めて思った。何度も話し合いを重ねていき、班の絆も深まった。話し合いは、仲が良いほど率直な意見が言えるので良いと思う。どれだけ準備しても完璧というものはないと感じた。準備したらその分だけ良いものが完成することがわかった。たった20分程度のプレゼンテーションを作成することがこれほど大変で難しいことだとは想像もしていなかった。それぞれで役割を分担して作業を進めるなど、組織の中で動いているような貴重な経験ができた。ゼミナール大会に参加して一回り成長できたと思う。

現状から見る電源構成のあり方

張ゼミ B 班 代表 永田慶太郎

1. 論文の要約

論文の目的は震災以後注目されている原発と再生可能エネルギーなどによる今後の電源構成について考えることである。まず、日本における現在に至るまでの原発の流れや発電構成について触れ、原発のメリットとデメリットを考え、福島原発事故の被害状況や復興と展望についてまとめた。その後、再生可能エネルギーについて、太陽光や風力などの5つの新エネルギーのメリットやデメリットを紹介し、また固定価格買取制度など再生可能エネルギーを普及させるための具体的な制度について紹介した。最後に再生可能エネルギーの発電割合の現状について紹介したが、いまだに日本は海外に比べ普及が遅れていることがわかった。むすびとして、現状では多くの電力会社が原子力に依存していることや放射性物質など原子力の問題点に触れ、将来的に再生可能エネルギーを促進させる必要があると述べた。

2. 大会でのやりかた

発表時間が15分で短かったような印象を受けた。また、大会までの過程で論文や各班に対する質問状の作成を行ったのだが、思ったほど時間が無く、部会長からの連絡で論文や質問状の交換をする際にも、後日遅れて提出する班も出てくるなど、日程の調整では難しい場面が多々あった。ゼミナール大会当日には、部会長が各班の発表時間を計り、1分前になると合図を出してくれたので、発表者側も各自時間を計算し、制限時間である15分前後には発表が終わるようにしていた。そのため、部会長がタイムキーパーを務める役割は大会を進めることにおいて、効率的なやりかたであった。

3. 大会で学んだこと

今大会で発表する論文の作成作業が大変であった。その作業中には先生に形式や構成について丁寧に指摘していただき、時間をかけながらも論文を完成させた。そのおかげで文章構成についてこれまでより細かく考えるようになった。大会当日には各班の発表を見て感じたことは、原稿を作って、それを見ながら発表する形式の班もあれば、原稿をいらずパワーポイントを見ながら発表する班もいるなど、形式が大きく異なることであった。特に後者を用いた班の中で、とても大きな声で内容が分かりやすく、見る者を引きつけるような班もあった。発表の仕方1つで皆を注目させ、発表内容について深く聴いてもらえるのだと感心した。自分たちの発表では大きな声で元気に発表するよう努めたが、制限時間を考えその時間内に収めることや発表内容を深く理解してもらえるようなわかりやすい発表を心がける必要があると感じた。

サブプライム問題はどのように世界へ広がっていったか

掛下ゼミ代表 日高穂波

1、報告論文の内容

第一章は、サブプライム問題の仕組みについて。サブプライム問題とは、信用力の低い層に向けて貸し出す住宅ローンの中で、それが証券化という金融技術によってリスクが分散され、世界各国の投資家に販売された。金融市場の中では、証券化市場においてサブプライム関連商品の価格が下落し、それが下落すれば、それを保有している銀行部門にリスクが還流し、銀行の資本毀損により信用創造機能が収縮すると、実体経済に影響を及ぼす。証券化市場の混乱でドルへの信認が低下し、流出した投機マネーは商品市場に流れ込み、その結果、資源価格の高騰は個人消費を冷やし、それが雇用に影響すると、また消費が冷え込むという悪循環に陥った。

第二章では、サブプライム問題の原因について。なぜ危険なローンが世界中に広がっていったのか。その原因は借金をして手持ち資金の数倍の取引を行うという意味のレバレッジにある。レバレッジをあげるほど利益も増えるが、その分、株価が下落すれば、一瞬で自己資産を失い、借金が生じる割合がぐんと高くなる。こうして支払いを継続することが困難となり、住宅価格がさらに下落した。また、証券化されることを前提とした住宅ローンが第三者へと転売され、証券化されて世界中の投資家へと販売されたことも、今回のサブプライムローンを巨大化させた原因である。

第三章は、サブプライム問題の影響について。サブプライム問題がアメリカの金融市場に与えた影響は、サブプライム関連商品を保有していた会社が破綻へと追い込まれたことである。実体経済に与えた影響は、原油価格高騰である。それまで証券化商品に向かって投資資金が原油先物市場へと向かったことにより、サブプライム問題が直接影響を与えた建設業や金融業は勿論のこと、自動車などといった裾野の広い製造業などの雇用情勢の悪化を引き起こした。さらに、日本へ与えた影響は、急激な円高であり、円高・輸出減少の影響を受け、問題になったのが日本株価の暴落である。この輸出企業の株安は相場に急激な下落の圧力をかけた。

第四章は、欧州危機について。2009年10月、ギリシャが深刻な財政赤字状態にあることが明らかになり、「デフォルト」に陥るのではないかと不安が金融市場に広がった。ギリシャ国債の下落により経営が悪化した金融機関は企業などへの支援をひかえるようになり、資本供給が縮小していけば、欧州全体の景気が悪化する恐れがある。事態を重く見たEUはIMFと共に、ギリシャに対して支援を決定し、資金調達が困難になったユーロ導入国への融資や銀行への資金注入などを担う「欧州金融安定基金」を設立した。

第五章は、まとめ。日米の金融構造の違いはあるが、アメリカの失敗をただ批判するだけでなく、国民経済発展のために参考にしていけることが大事だと考えた。

3、ゼミナール大会で学んだこと

サブプライム問題という少し難しい分野を発表するために、金融について知識が少ない人に対してどうしたらわかりやすく見やすいのか考える必要があり、それを工夫して伝えることのむずかしさを学んだ。また、個人が班の一員という意識を強く持って、班で協力して1から作り上げていくことの達成感がよかった。この自分たちではじめから作り上げていく作業は、今後必要になってくると思う。

1. 論文要旨

西洋の食文化の歴史を紹介した。食文化に関しては、**古代**の方が中世よりも発達していたこと。古代は地中海が中心で、ワインや海産物が好まれたのに対し、その後「蛮族」が進入したために食文化は大きく後退したこと。**中世**には騎士文化の影響から、肉を食べることが力と権勢の証だとする考えが広まり、現在に至る西洋＝肉食のイメージができあがったこと。中世の人々はナイフもフォークも用いず、手づかみで食べていて、テーブルクロスで手を拭いていたことなどを紹介した。

近世になると、アラビアの影響を受けて食文化がヨーロッパで最初に発達したイタリアのメディチ家から、フランス王の許にカトリーヌが嫁いだ際に大量の料理人を引き連れて行ったために、フランス料理が発達したこと。その際、フォークなどの食器やテーブルマナーも伝えられたことなどを紹介した。フランス革命後の**近代**には、革命によって多くの料理人が貴族の館から放り出され、パリなどでレストランを開いたり、他国の宮廷に抱えられたりして、フランス料理はヨーロッパ中に広まったこと。そして最後に、ヨーロッパ料理の最高峰とみなされるに至ったことを紹介した。

他方で、ヨーロッパからの移民が作った国**アメリカ**では、独特の食文化が開花した。なかでも、工場で大量生産された食品が普及したことと、ファスト・フードの流行が特徴的であった。最後に、第二次世界大戦後の**現代**に関しては、ヨーロッパの復興をアメリカが助けたためにアメリカ化が進み、加工食品、ファスト・フードがヨーロッパにも広まったこと。しかしその行きすぎが反省され、地元の食材と食文化を見直すスロー・フード運動が興ったことなどを説明した。

2. 討論内容

部会において討論されることはなかった。質問状で7つほど質問が出されたが、プレゼンの時は時間不足のため、2つにしか答えられなかった。

3. 学んだこと

プレゼンにおける時間配分などについて、学ぶことがあった。(小野)

担当したアメリカの食文化の成り立ちについて、知ることができた。(近藤)

複数のメンバーで何かを作り上げる難しさを学べた。(佐伯)

自分は論文担当だったが、できあがったプレゼンはすばらしかったと思う。(永田)

中世について、昔とはいえ貴族たちが手づかみで食べていたことが驚だった。(長谷川)

他の学生のプレゼンを見られたことは、またとない機会であった。自分たちのプレゼンの準備も、社会に出てから行うことの練習になった。(辺見)

複数で作業する際の、個人の責任の重さを学ぶことができた。つまり誰か一人でも遅れると、全体に支障を及ぼす。分かってはいたが、改めて認識した。(堀内)

計画性、作業分担、チームワークの大切さを学べた。チームワークでは班内の雰囲気が、効率よく物事を進めるのにいかに大事か分かった。(矢原)

報告書

松山大学橋本ゼミ C 班

高岡美香 藤原邦弘 間嶋亮太 渡辺一帆

論文概要

テーマ：愛媛県の地域活性化につながる名菓づくり

現在、日本の多くの地域で、少子高齢化をはじめとする様々な問題が深刻化している。労働者の高齢化などにより産業が衰退し、地域の経済基盤が不安定になる。それにより雇用の場が不十分となり、貴重な労働力である若者の都市部への流出が進行する。その影響を受け地域の少子高齢化がさら加速し、底の見えない産業の荒廃を招く。

私たちは大学の講義やゼミを通して、そのような地域社会に根付く問題について、広く学んできた。その中で、私たちは日本各地で行われている、「地域活性化」に関わるさまざまな取り組みに注目した。「地域活性化につながる活動」こそ、最も有効な地域問題解決の手段になると考えたからだ。次いで私たちは、全国で展開されている地域活性化につながる取り組みを詳細に調べた。そしてその中で特に注目したのが、今回の研究テーマである「名菓づくり」による「地域活性化」、すなわち「地域活性化につながる名菓づくり」なのである。

「地域活性化につながる名菓」には明確な答えや正解は無い。そこでまず、地域活性化につながる名菓の条件を、さまざまな調査をもとに分析する。ついで、地域活性化につながる名菓を作る上で重要な条件、そして、名菓を販売するにあたってより効率的な流通形態などを分析する。またその研究と並行して愛媛県の名菓の特徴などを分析し、上記の研究結果と併せて愛媛県(特に松山市)の地域活性化につながる名菓のアイデアを提案することが、この報告の目的である。

感想・反省など

論文・レジュメに関して

ただ文献などを使うのではなく、インタビュー、ヒアリング調査など消費者の生の声を論文に取り入れたことで、その説得力を増すことが出来た。商品を提案するだけでなく、実際にそのアイデアを製造会社に持ち込み評価などしてもらえれば、よりよい発表になったと思う。また客観性を出すために、もう少し統計のデータや図表を多く使用した方がよいと考えた。これは今後の課題である。

発表に関して

特に大きなトラブルも無く、スムーズに発表を終えることが出来た。事前に入念なりハーサルを行えたことが、その大きな理由であろう。発表会自体も進行が滑らかで、余裕をもって会を進めることができ、非常に良かった。ゼミ大会を通して得た経験は、就職活動、また就職後にも大いに役立てていきたいと考えている。

中国の経済成長が続くためには

宮本ゼミ B 班代表 川村未来

1. 報告論文の要旨

近年、目覚ましい勢いで成長していた中国経済であるが、格差問題、欧州危機、人民元切り上げなど様々な問題に直面している。これらの問題を解決しながら経済成長を続けていくために必要なことを考えた。

中国は貿易によって生み出される外需によって経済成長を続けてきた。しかし、輸出は欧州向けが非常に多い。欧州は欧州ソブリン危機から立ち直れおらず不況なので欧州向けの輸出額が減少している。よって今までの経済成長には限界がある。だから私たちは内需による経済成長への転換が必要であると考えた。中国の GDP に占める貿易の割合は 50% を超えている。しかし中国の人口は 13 億 5000 万人で、平均賃金が上昇しているので個人消費の増加は著しい。内需である個人消費による経済成長に転換が可能である。そのためには第 2 次産業から第 3 次産業への移行が必要である。急速な工業化により、資源の大量消費や環境悪化と貿易摩擦をもたらし、中国の GDP に占める第 2 次産業は 46.8% と世界の中でも非常に高い。サービス業の発展は、新たな国内需要の創出し内需拡大へと繋がる。

これらのことから私たちは中国の経済成長が続くためには外需による経済成長から内需による経済成長への転換が必要だと結論付けた。

2. 部会・分科会での討論

当日の質問はなかった。事前に交換した質問状への回答は以下のようになる。

・人民元切り上げとは？

—現在固定相場制である中国の為替市場を変動相場制に移行すること。

・提案で中国経済が外需に左右されないために、内需への移行が重要であると書いているが、政治の争いはどのような関係があるのか？

—政治の争いは外需から内需への移行には直接的には関係していない。しかし、内需拡大は自国の消費によっておこなわれるので政治の安定が重要になる。なぜなら、政治が不安定だと将来の政策への予測可能性を低下させ、積極的な投資計画や消費計画を難しくさせるからだ。

3. ゼミナール大会で学んだこと

ゼミナール大会を通して、1つのテーマを約半年かけて深く掘り下げて学ぶことにより理解、関心を深めることができた。また、班での活動は役割分担、スケジュールの立て方など様々なことを学ぶことができた。

聞き手を意識した配布資料、スライド、発表の仕方など今まで経験したことがなくとても苦労したが、配布資料とスライドは見やすくなるように工夫し、発表も原稿を読む形ではなく聞き手に語りかける形で行うことができた。

ゼミナール大会で学んだことを活かし、これからの就職活動を頑張りたい。

ゼミナール大会報告書

川東ゼミ A 班代表 梅木真理

私たちのゼミでは、「愛媛の偉人・日本の偉人」というテーマで愛媛に関係のある偉人について研究しました。なぜ、愛媛の偉人や日本の偉人を知ることが経済学部でのゼミに関係があるのか、疑問に思う人も多いと思います。現在、松山市には子規記念博物館をはじめ、子規堂、市内に多く建てられている、正岡子規や河東碧梧桐、夏目漱石などの句碑、坂の上の雲ミュージアム等、愛媛県に所縁のある人の施設などが観光の一部となり、また県内の経済効果にも、影響を与えていると思います。愛媛といえば坊っちゃん、俳句の町愛媛と言われる要因になった偉人について研究することが、私たちには必要なのではないかと思い研究することにしました。

今回、中井さんが正岡子規、松本君が夏目漱石を研究し発表しました。まず、夏目漱石の発表では、調べた理由や年譜の紹介、また質疑応答などの発表をしました。夏目漱石は愛媛を題材にした小説、「坊っちゃん」を著しました。発表や質疑応答を通じて、少しでも夏目漱石のことを知ってもらえたのではないかと感じました。

次に正岡子規の発表では、第 1 章で子規の性格や年譜、第 2 章で子規と交流があった夏目漱石や高浜虚子などの紹介、また第 3 章では子規が松山に残した多くの俳句や短歌の紹介をしました。子規の文学に対する思い、そして常に向上心をもっていた彼について知ってもらうことができました。また、子規が愛媛に残した俳句の文化は、現在、全国俳句甲子園というものが行われており、主催する愛媛県は絶大な経済効果をもたらしています。そのことについても発表しました。

発表の反省点として、夏目漱石の発表ではもう少し分かりやすいしゃべり方でゆっくりと話した方が聞き手に伝わりやすかったのではないかと感じました。内容については、詳しくなりすぎて、夏目漱石のことをあまり知らない人が聞くには専門的になりすぎて分かり難かったように思います。

正岡子規の発表では、少し声のボリュームが小さく、まとめ方自体は良かったのですが、そこが少し残念だったと感じました。俳句の紹介をもっとすれば、より良い発表になったのではないかと感じました。各ゼミからの質問には的確に答えることが出来ていたという点は非常に良かったと思います。

他のゼミの発表を聞いて、プレゼンテーションのやり方など参考になることも多くありました。インタビューや調査などを行っているゼミもあり、見習う点が幾つもありました。今回のゼミナール大会を通じて、他のゼミの発表をみて勉強になったのは勿論のこと、自分のゼミの発表を振り返ることができる良い機会となりました。この経験を生かし、次回に繋げていきたいと思います。

ゼミナール大会報告書

「東日本大震災の影響による訪日外国人旅行者の減少に伴う経済波及効果」

第7部会 間宮ゼミ A班

今回のゼミ大会では、「東日本大震災の影響による訪日外国人旅行者の減少に伴う経済波及効果」をテーマに調査し報告した。

第1章では震災前と震災後の訪日外国人の増減について調べその結果を年代別、国別にグラフや表にまとめ、その結果から読み取れる訪日外国人の増減の変化を、それぞれ年別に起きた政策や景気悪化の原因と照らし合わせて説明した。特に大きく減少している2011年に起こった東日本大震災がどれだけ訪日外国人に影響しているかを説明するため、月別にまとめ、震災が起こった3月からと前年の同月とを比べ大きく減少していることがわかった。これにより東日本大震災がどれだけ訪日外国人減少に影響していることを証明した。2章では、まず産業連関分析について説明した。産業連関分析について、旅行者がデジタルカメラを購入する際の事を例にして説明した。次に外国人旅行者が、何にお金を使っているか調査し、買い物の傾向についての調査結果を説明した。宿泊費と買い物代が全体の約6割の金額を占めており、さらに買い物代の約7割を電化製品と衣料品が占めていた。3つ目に、マージンについて理解してもらえるように説明した。購入者価格は、生産者価格と産業マージンと運輸マージンから成っており、生産者価格は原価である、また産業マージンは販売者の売上であり、そして運輸マージンは輸送費である。産業連関表を用いて産業連関分析を行う際は、購入者価格からマージンをはぎ取りそれぞれ別に産業連関表に当てはめていかなければならない。これらのことを、説明した後に東日本大震災の影響による訪日外国人旅行者の減少に伴う経済波及効果の調査結果を説明した。旅行単価約2900円、旅行者約250万人の減少が約3400億円の直接効果をもたらした。これによって約2500億円の1次波及、また約690億円の2次波及を引き起こし、全体として約6200億円のマイナスの経済波及効果をもたらす結果になった。これらのことをゼミ大会で報告した。今回の私たちのテーマである「訪日外国人旅行者の減少による経済波及効果」に対する事前の質問では、「このような訪日外国人観光客の減少が起こっている中でどの用にすれば訪日外国人観光客を増やすことができるか？」という質問があった。私たちが調べたのは「訪日外国人旅行者の減少による経済波及効果」までであり、その後の対策などは調べていなかったので非常に答えに困る質問であった。私たちは文章を読めばわかる様なことでも、初めて聞く聞き手としてはなかなか理解しにくい点も少なからずあった。そのため私たちはその図表により詳しい説明をつけることができた。

私たちがゼミ大会を通じて学んだことは、まずは自分たちの研究内容から日本のGDPの約0.07%に当たる約3200億円の減少を引き起こし、近年の日本の経済成長率は1%であり、訪日外国人者の減少により日本経済に大きな打撃を与えたことがわかった。調査の結果経済波及効果は6200億円減少しており、これから就職活動をしていく自分たちには衝撃的だったのは、就業者54235人、雇用者41444人の減少を引き起こしていたことは衝撃だった。次に大会全体から学んだことは、ゼミ大会では決められた時間の中で自分たちの研究をどれだけ詳しく説明できるか、かつどうすればわかりやすくなるのかということに苦労した。この2点を上手く合わせて発表資料を作るのにとっても時間が掛った。みんなで協力して作業すればよい結果が生まれるということを改めて学んだ。

ゼミナール大会

張ゼミ C 班 代表 岩佐和樹

1. 報告論文の要旨

本論文では東日本大震災に伴う原子力発電所の停止により、電力不足となっている地域へ電力を送るため、節電を行うにあたってのさまざまな制度について紹介している。本論文の目的は、今夏導入された節電対策の種類と内容を分析し、その実効性および妥当性を検証することにある。まず普段何気なく使用している電気、すなわち電力はどのようにして需要家へ供給されているのかを述べた。二つ目に、日本の電力会社の現状を把握するため、前後の変化過程とりわけ1990年代半ばから行われた規制緩和をとり上げた。三つ目に、現行の電力料金制度の中での理論や仕組みを詳しく見た。節電対策が経済的なインセンティブに基づいている限り、その基本的な枠組みが欠かせない。最後に時間別 PS 料金・電力使用制限令・電力需給契約・ネガワット制度などの各種制度を分析した。こうした制度がいかなる特徴を持っているのか、また実際どう運営されたのかについてその効果と問題点について詳しく取り上げ、今後の制度の改善策を探るものである。

2. 部会・分科会での討論内容

報告会では、あらかじめ各班から寄せられた質問についての回答を行った。質問の内容としては(1)太陽光発電を行うと節電には大きな効果があるが、コスト的には大丈夫なのか。(2)節電のためのインセンティブ制度で最も効果的なものは何か。この2点の質問についての回答を行った。(1)については、国と県から補助金が出ることや設置費用が無料になるなどの制度があるため国民の全額負担ではないという返答をした。(2)については、ピーク時の電気料金を上げることで国民が節電を意識するようになるため時間別 PS 料金制度が最も効果的であると考えたと返答した。

3. ゼミナール大会で学んだこと

今回のゼミナール大会を通じて学んだことは、主に論文の作成方法である。自分を含め、班員全員が論文に対する知識が未熟で多くのミスを犯してしまった。しかし、その都度先生が適切な指導を行ってくれたため完成に至ることができた。協力して1つのものを完成させたときの達成感は非常に大きいものであった。また、班員の作成した論文をまとめることで、論文の知識を少しは高められたので代表という役職を務めることができ良かったと思う。ここで学んだことは、のちの卒業論文や会社に入ってから報告書作成などの際に重要となってくるのでもっとスキルを磨いて次に生かしていこうと思う。

報告会では他の班の発表を見て、さまざまなプレゼンテーションの方法を学んだ。PowerPoint をうまく利用して聞き手が理解しやすいようにアニメーションが施されており、多くの工夫が見られた。社会に出て会社に入るとプレゼンテーションを行う機会は必ずあると思うのでゼミナール大会はその練習をする絶好の場であると思う。

ゼミ大会報告書

教育からみる人間と経済 久保ゼミE班

11100550 上松正貴

- 1) ここでは教育という視点から現代の人間に教育が与えている影響や問題点を考え、また教育が家計という身近な経済にどのような影響を与えているのかを調べるというのが主題となっています。それぞれ章ごとに紹介してあります。まず第一章では今の子供の教育を受けることに対する意識やそれにつながる取り組みについて調べました。そして小学生のころは勉強に対してよく取り組んで楽しんでいた子供の割合が中学、高校と下がってきている実情が浮かんできました。しかし友達に負けたくないから勉強するという意味は段階を踏むごとに高い割合を示していることもありここから現代の競争社会を表しているように感じる。個人的にはいいと思っています。第二章では学校で起こる問題としていじめやモンスターペアレントについて説明している。表であげたのだが学校で起こる暴力事件の件数は年々増えており中学校に至っては小学、高校と比べても圧倒的に多い。これは個人的に思春期だからと勝手ながら考えている。第三章ではゆとり教育について調べた。ゆとり教育がどうして始まったのか、成果はどうだったのか、本当に失敗だったのかなどを表しました。そして前身である詰め込み教育がどのようなものだったかも表している。第四章では家計における教育費はいくらなのかということ表を使い、小学校から大学までいくらかかるのか平均したものを表して表現しました。最後のまとめでは教育の矛盾を新たな改革によって改めなければならないという個人的な考えでまとめました。
- 2) 討論は行いませんでした。
- 3) ポスターセッションでの発表を行ったのではっきりいってかなり暇でした。聞きに来た人にだけにしか説明しないのですぐに説明が終了したりしました。聞きに来てくれた人には補足の説明を入れたり簡単な質問に答えたり表の説明をしたりしました。三つ質問がありそれぞれこのような質問でした。ゆとり教育はどうして失敗したのか、どのような教育改革をしたらよいのか、ゆとり教育はどのようにしたら成功したと思いますかこの三つの質問が上がりました。一つ目の質問に対しては子供の自主性にまかせて勉強させようとしたのが悪いと考えます。確かに小学生のころは楽しんで勉強している割合が多いことを第一章で表したのだが、あくまで学校ですということ自分の家で自分から勉強しようとは考えないだろう。だから勉強を自分からしようという意識を個人にゆだねてしまったため失敗したのだと考えますと回答しました。の質問に対してはゆとり教育の失敗からまず子供に勉強することへの意識付けを行うことから始めた方がいいと考える。これをしないことにはどんなに素晴らしい教育改革でも学力の低下を招いてしまい失敗すると考えると答えました。一つ目の質問に対しても一つ目と同じように答えました。ポスターセッションということで受け身の形でおこないましたが結果は予想通りでした。しかし大会という形で他と違うことがなかったのでもいい経験になったと思います。

1. 研究内容

社会保障と税の一体改革は、消費税率を現在の5%から2015年に10%まで引き上げることで社会保障の充実と安定化、財政再建化という、2つの問題を解決しようとしている改革である。論文の目的は、社会保障制度の内容や問題点を分析し、持続可能性を保つためにいかなる改善策が必要なのか考案すること、社会保障制度の現状がどのような状態にあるのか、また社会保障の費用とその財源がいかに確保されているか概略的な検討を行うこと、消費増税に伴う対策や逆進性について検討すること、であった。全国の社会保障給付費の推移について紹介したが、社会保障給付費が年々増加しているのに対して、社会保障料収入は近年横ばいで推移しているため、社会保障給付費と社会保障収入の差額は拡大傾向にあるということが分かった。次に、愛媛県の社会保障費における推移と変化の原因を見ると、ほとんど右肩上がりの増加傾向であることが分かった。今後の社会保障制度全体の在り方としては、給付と負担のバランスを確保しながら、国・地方が協調して政策の重点をリスク発生後の保障だけにとどまらず、予防・自立支援に重点をおいていくことが重要であり、世代間および世代内の給付と負担の在り方の見直しや財源の確保など、国民の合意を求めながら持続可能な制度としていくことが欠かせない。また、消費増税には逆進性という問題が存在し、その対策として軽減税率と給付付き税額控除が有効であると結論づけた。

2. 討論内容

今後の社会保障の財源確保のために如何なる政策が有効か、今政府が何をしているか、またこれから政府はどのようにしていくべきか、という質問が多く見られた。

3. 大会から学んだこと

我々の班は六人であったため一人一人が苦手な分野をお互いに補いながら資料集めや文章作成など分担して行うことができた。そういったことからチームワークが生まれ、協調性のある班であったと思う。また、この大会ではそれぞれの班の代表がスライドを使って報告を行うという形であったが、良い報告は、自然と顔が上がって話が入ってきやすいと感じた。そういった班は、図、カラー、アニメーションの使い方、喋り手の声のトーンが上手いことが挙げられた。こうしたことはこれから我々が社会人となり企画、プレゼン等を行っていくうえで非常に重要な力であり、もっと養っていくべき力だと感じた。よって、このゼミナール大会に取り組むことで協調性、チームワーク、プレゼン力を学ぶことができたと感じている。

要旨

今回報告した論文は渋沢栄一と秋山好古の生涯についての報告であった。渋沢栄一は、幕末から昭和初期に活躍した日本の武士、官僚、実業家、社会事業家である。第一国立銀行や東京証券取引所などといった多様な企業の設立・経営に関わり、実業界で指導的役割を果たした。日本資本主義の父と言われていて、日本の経済近代化の最大の功労者である。発表者の芳井さんは「なぜ渋沢栄一をテーマにしたのか？」という質問に対して「多くの企業の経営に関わった実業家であると同時に社会事業によって人々に貢献した素晴らしい人物であると考えたから。」と答えた。

秋山好古は安政6年（1859年）に伊予国松山城下中歩町（現愛媛県松山市歩町）に生まれる。後年、陸軍に進んだ好古は、革新的な騎兵技術を生み出し、日露戦争での奉天会戦の勝機を導く働きをし、日本の勝利に貢献した。晩年は北予中学校（現愛媛県立松山北高校）の校長となり、教育者としても活躍した。発表者の福田君は「母校の3代目の校長である秋山好古について何も知らなくて、なぜこれではいけないと思ったのか？」という質問に対して「好古は、昔、（不良少年養成所）と言われる松山北高校を変え、不良を減らしました。好古が変えなかったなら松山北高校はなくなっていたかもしれないので、好古のことを知らないと思礼に値すると思った。」と答えた。

ゼミナール大会で学んだこと

発表するゼミの中には、椅子に座って発表するゼミと、立って説明する2つの発表の仕方があった。椅子に座っているゼミはただ事前に用意している紙をそのまま読んでいて顔が常に下を向いていたことにより声の通りが悪く、聞き取りづらかった。反対に立って発表するゼミの方は、手で気持ちを表現しようとした様子が見られたり、顔も正面を向いていたので聞き取りやすかった。立って発表しているゼミの方が生き生きとして伝わりやすかったように感じたので次回から発表者は立って発表したほうが良いと感じた。

私たちの発表した内容には、写真や絵がほとんどなく、伝わりにくい発表であったが、他のゼミの発表の中には、グラフを用いてわかりやすく説明していたゼミや、写真やスライドを用いていたゼミもあり、躍動感があって伝わりやすかったように感じた。私たちのゼミもどうしたら聞く人に伝わりやすく発表できるのかと相手の立場にたって考える必要があったと感じた。またゼミナール大会では順位が決まるのだが、私達のゼミの中で1位を取ろうと意欲のあるものがいなかったように思える。発表者を誰にするか決めるためにまずゼミのメンバーで投票を行い、発表者が決まってしまうと、他のメンバーは後を代表者に任せっきりであった。他のゼミは何人かのグループで作ったものを発表したものに対して、私たちのゼミの発表は個人が作ったものを発表していた。それにより発表する構成を考えることも1人で作業していたため、意見の交換できず、発展がなかったように思える。そして私達のゼミの発表では、報告時間の20分のうち最初の発表者が18分間発表してしまうという予想外の出来事が起きた。2番目の発表者は少しだけ時間を延長するだけで何とかまとめることができたが、2番目の発表者は時間がないのでとても焦っていたことだと思う。これも発表者が当日発表する内容をメンバーで共有しなかったことが原因だとあげられる。発表者がゼミ大会当日に発表する内容をメンバーで共有して意見を出し合うことの重要性を痛感した。

1. 報告論文の要旨

2011年の東日本大震災により原子力発電所が稼働停止に追い込まれ電力不足に陥った。その結果、家庭・企業にかかわらず節電意識が高まった。このことから私たちは節電によって日本経済にどれだけ影響を与えたのかを産業連関分析を用いて調べた。

まず、節電については2010年と2011年の6月～8月で1世帯当たり平均消費電力の差額を求めた。これに日本の全世帯数をかけ、夏の節電によって減少した消費電力の総額とした。クールビズについては、クールビズ関連商品の購入によってどれだけ影響があったのかを調べた。クールビズの対象としたのはホワイトカラーの男性でシャツやスーツなどの繊維製品及び革靴のなめし皮製品とした。クールビズが始まった2005年から2011年の6月～8月のデータを持ってきたうえで回帰分析を行い、傾向値と2011年の購入金額の差額を求めた。これにホワイトカラーの男性の人数をかけ、節電によって増加した購入金額の総額とした。

次に、産業連関表を用いて実際に経済波及効果を調べた。家庭の消費電力の方は、約622億円の減少が直接効果として求められた。これにレオンチェフの逆行列を用いて、第1次波及効果として約393億円の原材料生産減がみられた。これによって雇用者所得が約171億円減少し、消費需要減による生産減として約191億円の第2次波及効果がみられた。これらを合わせて、約1207億円の生産減となった。クールビズの方は、直接効果として約53億円の需要増加が求められた。第1次波及効果として約25億円の原材料生産増がみられた。これによって、雇用者所得が約19億円増加し、消費需要増による生産増として約21億円の生産増がみられた。これらを合わせて、約83億円の生産増となった。

最後に消費電力とクールビズ商品の需要増加を合わせて節電の影響を求めた。家庭の節電による消費電力の減少が大きいので経済効果だけをみると大幅な損失になるが、その後CO₂の排出量を求めた結果、約130万トンの排出削減が見受けられたため、環境に対しては大きく貢献していたといえるだろう。

2. 質疑応答

他のゼミからの質問が思いのほか難しく、特に海外に関する質問が来るのは想定外だった。また、すべての質問に答えることができなかった。

3. セミナール大会で学んだこと

今回のテーマである「家庭の節電による経済効果」によって導き出された節電とクールビズの経済効果の結果から、これら二つの経済効果を合わせて考えてみると経済面においてはマイナスだが、CO₂削減という観点からみると近年の日本における1年間のCO₂排出量の内、約0.11%を占めており、このことからCO₂削減に大きく貢献していることが分かった。このことからこれからのCO₂削減に節電は欠かせないものになると同時に、経済面とのバランスも考えていかなければいけないと思った。また、今回の発表の準備において、分担して協力することの重要性と如何に時間を作り、計画的に作業を進めなければいけないかがよくわかった。発表本番においては想定していたよりスムーズに進行することができ、時間配分もうまくできたと思った。反省点としてはレジュメのミスや専門用語の説明が不足していると感じられたことが挙げられる。

消費者の購買行動の変容

宮本ゼミC班代表 黒澤由

1. 報告論文要旨

私たちは、情報の変化による消費者の購買行動の変容をテーマとし、購買手段や業界の歴史、アメリカの例や日本の現状を用いて報告した。

このテーマを選んだ理由は、消費者の購買手段は常に変化していると考えたからである。かつて消費者は製品に対する知識が乏しく、売り手の知識を参考にすることで、購入する物を決定していた。これは情報の非対称性と呼ばれるものだ。しかし高度経済成長期以降は、個人のニーズや好みが重要視されること、また消費者の知識が増えたことから、情報が対照的になってきた。このことから私たちは、消費者の購買行動には、消費者が得られる情報の変化が関係していると考えたのである。

私たちはこれらを報告するにあたり、生活に必要である衣、食、住のカテゴリの中から、家電と衣料をピックアップした。家電については、まずアメリカの例に用いた。アメリカの家電量販店が大手2社になったことは、インターネットの普及により消費者が以前より多くの情報を得ることができるようになったこと、通信販売の登場が購買行動に影響を与えたことが挙げられる。このことから、次に日本のインターネット普及率や通信販売の現状を見ていった。インターネットの普及率が高いこと、通信販売の大手である楽天の売上が伸びていることから日本でもアメリカのように購買行動が変化してきていると報告した。衣料では、特に日本の通信販売の現状を見ていくために、Zozotownについて報告した。Zozotown が伸びていることから、やはり日本ではインターネットの普及により、購買行動が変容しているのだと考えられるのである。

以上のことから、消費者の購買行動の変容には、インターネットの普及による情報の変化が関係しているのだ。インターネットの普及は、消費者に情報をもたらすだけでなく、通信販売という新しい購買手段を与えたのだ。そしてこの通信販売は私たちの生活の中心になる、という結論に至ったのである。

2. 討論内容

質問状でいただいた質問に回答した。質問内容は、消費税増税での購買意欲の変化について、購買意欲に性差は関係しているか、高齢者のインターネット利用について、店舗販売の持ち味とは、小売業が生き残るためには、生き残る日本の家電量販店は数社に絞られるのか、通信販売に対する量販店や直営店舗の対策とは、の7問であった。

3. この大会で学んだこと

私たちは約半年間、この大会のために準備をしてきた。その中で2つ学んだことがある。1つ目は、自分たちが選んだテーマについて様々な視点から考えることの重要性である。違う視点からモノを見ることで、一般的な考えだけではなく、自分の意見を持つことができるようになったのだ。しかし、視点を変えることや調べるべきことを見つけるのは困難であり、指摘してくれる人が必要であると思った。2つ目は、報告内容や班の活動をスムーズに進めるための方法や心構えである。長期間の班活動では、役割分担やそれぞれの仕事に期日を設けていたことが、良かったと思う。そうしたことにより、週に1回程度行っていた班の集まりは非常にスムーズに進められていた。またひとりひとりが責任を持って活動できていた。今後はこの経験をこれからの就職活動やその後に生かしていきたい。

ゼミ大会まとめ

第8部会 橋本ゼミD班

富永真央、城戸康次、栗原直也、富永幸希、西山栄一

・発表まとめ

私たち橋本ゼミD班は地域活性化の手段として最近注目されてきたNPOについて研究、発表を行った。初めにNPOとは何なのか、ボランティア団体とはどこが違うのかということについて説明した後、全国で地域活性化を実現することに成功したNPO法人の具体例を紹介した。今回は全国の成功例として「不忘アザレア」「四日市市生活バス」を取り上げた。そして私たちの研究のメインになっている愛媛県内のNPO法人について発表した。今回は愛媛県内で活躍するNPO法人の代表例として「愛媛フィルムコミッション」「いよココロザシ大学」「YGP-八幡浜元気プロジェクト」の3団体を取り上げた。具体的な内容としては「愛媛フィルムコミッション」においてはフィルムコミッションとは何なのか、活動内容、これまで誘致してきた作品の紹介を行った。「いよココロザシ大学は」これまで行ってきた授業の紹介、私たちが直接参加させていただいたSeeD-本気アイデアプレゼンテーションの紹介をした。「YGP」についてもこれまで行ってきた活動のまとめ、最近発表された今後取り組んでいく活動の紹介、私たちが直接インタビューに行き代表者の方に聞いたことや感じたことの発表を行った。最後に今後のNPOの地域活性化への可能性と私たちのような学生ができるNPO法人との関わり方についてまとめて発表を終了した。

・発表感想・反省

今回無事発表を行うことはできたが、反省すべき点多かったように思う。まず、当日についてだが、発表資料の完成が遅れ、発表の練習がきちんとできなかったことだ。もっと早く練習に取り組むことができれば、より発表の見栄えはよくなり、発表者も余裕をもって発表することができたと思う。次に内容面だが、NPO法人が地域に密着している以上NPO法人の活動について市民や参加者のかたがどのように感じているのかを調べる必要があったように思う。ヒアリング、アンケートなど様々な方法が考えられるが私たちのグループは直接NPO法人の方にお話しを伺いに行ったり、活動にも参加しているわけだから機会はいくらでもあったと思う。そのときに市民の人々の声を聞き、NPOに対してどんな印象をもっているのかを発表すればより一層NPOについて発表を聞きに来てくれた人々に伝えられたのではないかなと思っている。しかしながら発表全体としては私個人としてはおおむね成功だったのではないかと考えている。自分たちの研究の成果を伝えることはできたし、ゼミ大会に参加していた他のグループの人にも、私たちの発表に対して褒めてもらうことができた。だから、後悔するような発表にはならなかったと思う。

報告書

8 部会 F 班久保ゼミ

11101100 河津政信

「愛媛の養殖産業について」

1 内容は愛媛の養殖漁業、特に宇和島を中心にしました。内容は宇和島の養殖業の一般的な事業内容や環境問題への対策や消費者の変化についてまとめました。宇和島海は全国的に見ても養殖業の生産額や市場規模が大きく様々な養殖魚を生産しています。養殖業は戦後の日本経済とともに成長し現在ではグローバル的な市場戦略を計画しています。また、養殖業だけではなく真珠産業の隆盛から衰退にいたる流れをまとめました。鉱物ではない宝飾品の真珠をどのように生産して成長したか。現代の厳しい不況の中、養殖業者はどうゆう企業戦略立てているのかを調べました。

2 各班の発表はとてもすばらしいものが多かったです。特に宮本ゼミの報告は聴衆のことを考えていて飽きさせない発表をしていました。パワーポイントにキャラクターや写真などをたくさん用いていました。橋本ゼミの NPO についての報告もかなりおもしろい内容になっていました。映画撮影現場を提供することにより映画を観終わったファンが積極的に現地に行き撮影所巡りをして地域活性のきっかけになったという報告を聞きました。各班にあった改善点はタイムギリギリが非常に多く報告会の進行を滞る事態が発生していました。また、発表時に論文をそのまま読み上げる班があったため聴衆がだらけてしまうことがあったのでそこは気をつけないといけないと思いました。

3 ポスターセッションは初めての試みだったため結果的には不発に終わりました。

他の班の発表を見る限り私のポスターセッションは人が食いつくほどの魅力がなく反省するところが多くみられました。発表時間が休憩時間だったために見るタイミングが合わない人がいたかも知れません。ポスターセッション自体が初の試みだったため参考になる資料がなかったですが、実際に発表することで見やすいグラフ図を制作し文章を簡潔にしたポスターを作る大切さを学びました。ポスターセッションは基本一人で論文を制作しました。かなりしんどい作業もありましたが論文を書き上げた達成感は次回の卒業論文の制作において大きな自信になると思いました。しかし、ゼミナール大会の論文やプレゼンなどはチームで制作した方がクオリティの高いものが出来上がっていたためチームで協力して作成する合理性、効率性を痛感しました。今回の経験をこれからのプレゼンテーションなどに役立てるようにしていきます。

1. 報告論文の要旨

今回私たちはリーマンショックなどにより大打撃を受けた自動車産業の復興及び環境保全のために施行されたエコカー減税・補助金政策に目を向け、どれほどの経済効果を与えたのか、また国内総生産はどれだけ上昇したのかを調査・分析するとともに、この政策に使用した金額を公共事業に投資した場合を想定し比較を行った。

まず、政策に使われた金額を調べ、2010年の自動車販売台数からリーマンショックが起る以前の2004年～2008年の自動車販売台数の傾向線との差を比較しこの差をエコカー減税・補助金政策により得られた自動車の販売台数とした。次に、自動車の単価を求めそこからマージンの計算を行い、産業連関表の作成をし、求めた数値を産業連関表にあてはめることで経済波及効果と国内総生産を求めた。

その結果、

- ・エコカー減税・補助金政策により 1兆 0879億 0334万 7000円の波及効果並びに 5351億 4069万円の付加価値増

- ・公共事業の場合 7958億 3163万 5400円の波及効果並びに 3914億 7034万 1200円の付加価値増

となり、エコカー減税・補助金政策と公共事業とでは波及効果に関しては約3000億円、国内総生産においては約1400億円の差が出るのが分かった。よって、エコカー減税・補助金政策はかなり有効な手段であったと言える。

しかし、短期的にはいい効果を得られたが、これは自動車を欲しいと思っている人たちの購入を前倒しにただけであり自動車産業は厳しい状況に変わりはない。今後の政府・自動車産業の動きに注目していきたい。

2. ゼミナール大会で学んだこと

今回のゼミナール大会を通して、人にものを伝えることの難しさを知った。私たちは産業連関分析を用いて調査を行いその内容を発表したのだが、発表の原稿及びパワーポイントの作成をする上で一番注意をしたのが産業連関分析についての説明である。聞いている人たちに対してどのように説明をすれば解りやすくかつ簡潔に伝わるのか、ということに時間を費やした。

また、準備の大切さを学んだ。発表の練習が少ししかできていなかったもので、他のグループの発表を聞いていても練習しているところとそうでないグループの発表の仕方に大きな差があったため、当日までにもっと練習をしておけばよかったと終わってから実感した。そして、発表するまでの準備段階で班内での役割分担に偏りができていたため、次にこのような機会があれば改善できるようにしていきたい。

商店街の現状と展望

鈴木ゼミ A 班 代表 田中貴大

1 報告論文の要旨

世界的な不況、大型スーパーへの客の集中、少子高齢化による後継者の不足など、様々な要因により中心商店街が衰退している。そこで私たちは、その現状を把握するために内子町の笹祭りの時に、内子町商店街に赴き、アンケート調査という形で地方商店街の現状を把握することに務めた。そのアンケート結果を用い、内子町の規模、商店街の現状、後継者の現状、町民の反応、観光客の反応を調べ、論文としてまとめた。また、全国の商店街の中には活性化に成功している商店街もある。そこで、香川県、滋賀県、鳥取県の3つの商店街を挙げ、それぞれの商店街がどのように成功したのかを述べた上で、私たちが考える解決策を述べた。

2 部会・分科会の討論内容

Q「香川・滋賀・鳥取以外にも成功している県があるのですか？」

A一概には成功とは言えないが、全国各地には多くのアイディアを駆使し、商店街の活性化を図るところは多くある。(北海道、岩手、兵庫、熊本、愛媛など)

Q「何故内子町を調査したのですか？」

A内子町は地方の小さな商店街にも関わらず、空き店舗が少ない。全国の商店街では後継者不足が問題になっているが、内子町の商店街には多くの後継者がいるということで全国的に見ても再生可能性な地方商店街であると考えられること調査した。笹祭りで内子町の中心商店街を訪れた人が多く、写真撮影なので観光客も多くなってきている。

3 ゼミ大会で学んだこと

私たち鈴木ゼミは、商店街班、道の駅班、限界集落班と3つの班に分かれ、それぞれアンケート調査のために現地に赴き研究をした。文系のゼミは、ネット・文献をもとに論文を発表する形が多いと思うが、私たちは実際に現地に行き調査を行なった。現地に行ってみると、現状把握もしやすく、インターネットや文献では分からない地域住民の声や人の動きなど様々なことを感じとることができ、現地調査の重要性を学んだ。また、研究をして行く中で他県との比較や実際の数値など、より具体性を出すために様々な工夫の重要性を学んだ。例えば、アンケートをグラフにすることで、いろいろな視点でアンケート結果を見ることができ、またそれについてたくさんの考え方ができるようになった。ゼミ大会で商店街のことを調べたことによって、商店街に関する新聞、ニュースにとっても敏感になった。

1. 報告論文の要旨

エネルギー資源の長所と短所を見比べて、化石エネルギー・再生可能エネルギー・原子力エネルギーからどのエネルギー資源を選べばよいのかメリットとデメリットを比較して選択しなければならない。CO₂排出量を減らすために京都議定書が設置され、排出量取引によりCO₂排出量を減らしつつある。脱原発を行うには、再生可能エネルギーに頼るか、新たな発電方法を導入していく必要がある。

2. 部会内での討論内容

再生可能エネルギーは、化石燃料などに比べると枯渇性の心配がないこと、資源量が多いこと、政治的な駆け引きによる供給途絶の心配がないこと、環境への負荷や影響が小さいことなどの特徴がある。しかし、再生可能エネルギーには、エネルギー密度が低いことや、地域や時間に、依存して変動するため安定的な供給が現在の技術や社会体制のもとでは難しい場合が多いなど、実用化に向けてはまだ課題が多いことも指摘されている。

CO₂排出取引とは、京都議定書による温室効果ガスの削減を補完する京都メカニズムの1つである。京都メカニズムには、排出量取引のほか、共同実施・クリーン開発メカニズムがある。京都議定書は、米国が参加していない、削減義務がもともとの削減余力を適切に反映していない、一部途上国が大量排出国であるにもかかわらず削減義務を負っていないなどの問題点も指摘されてきた。しかし、排出権取引は、地球温暖化の原因となる二酸化炭素の排出抑制のための新しい方法なのである。

脱原発を行った場合の電力不足を解消するためには、やはり、再生可能エネルギーに頼る必要がある。今の技術では膨大なコストが必要になるが、技術力は確実に上がっており、次第に再生可能エネルギーにシフトしていくことでCO₂排出量の問題も解決されると考えている。

3. ゼミナール大会で学んだこと

ゼミナール大会では二つのことを学ぶことができた。一つめは「シミュレーションの大切さ」である。事前のシミュレーション不足のため、大会当日の資料の配布に時間がかかってしまい参加者に迷惑をかけてしまった。また、後ろに座る人が多かった。このような問題点があったので、資料を一番前の席に置き、参加者にとってもらい、前の席から座ってもらうという方法をとるべきだったと思う。

二つめは「まとめることの大変さ」である。提出期限ぎりぎりになることが多かったので、メンバーへの連絡を早めに取りべきだったと思う。また、メンバー間での連携が取れておらず、論文内容の方向性がバラバラになってしまった。代表が話し合いの場を設けて、全員の意見を取り入れつつ論文の方向性を決めるべきだったと思う。この反省を今後にかかしていきたいと思う。

違法ダウンロードが与える影響

1. 論文の内容は違法ダウンロードが経済にもたらす影響について調べ、まずなぜ違法ダウンロードについて調べようと思ったのかを説明し、法律について説明した。そしてなにが違法になり、何が違法にならないのかを簡潔に説明し、違法にダウンロードした者はどのような刑罰が与えられるかを説明した。

なぜ違法ダウンロードがいけないかというと、一人のものが違法にダウンロードできるようにした場合一人だけが購入しただけでみんなダウンロードできてしまい、その利益が全く入らなくなってしまうということが起こってしまうということを説明した。

そして実際どのくらいの被害を受け違法ダウンロード刑罰化に対して反対か賛成かのアンケートの結果を載せ現段階での国民の意見が分かるようにした。

結果、違法ダウンロードに対しての法律を制定してもあまり効果が見られなかった。よって違法ダウンロードを少なくする方法は一人一人が意識を持ってあまり使わないように努力することが違法ダウンロードを少なくする方法だと述べた。

2. 部会・分科会の討論内容としてまず動機を言い、法律がいつ可決、施行されたかそして罪に問われること、問われないことを説明し、課せられる刑罰を簡潔に説明しその後違法ダウンロードはどのような仕組みで行われているかを図で説明した。そして違法ダウンロードの刑罰は必要か必要でないかをアンケートをとり、集計したものを載せ、そしてその違法ダウンロードで起こった被害額を調べ、刑罰化の効果を述べた。そして、結果を述べ質問文への回答を行った。

3. ゼミナール大会で学んだことは、班のみんなで協力してひとつのことに取り組むことの大事さ、そして期限内に終わらせることの難しさを身にしみて知ることができた。

そしてゼミナール大会発表当日は前で発表することがどれだけ緊張し、みんなに聞いてもらえることによって今までやってきたことがみを結んだと実感できる大会でした。そしてすべてのグループの発表を聞き採点するところでも自分たちの発表と違うところを見つけ、自分たちが優っているところ、または劣っているところを見つけ出せ、反省にもなるしまた他人のいいところを盗めることもできた。例えば、他の班は事前にプレゼンの練習をしていて計画的なプレゼンだったのに対し、自分たちのグループは先週まで打ち合わせをしていなくて当日はぶっつけ本番の発表になってしまった。反省する点は次回からもっと時間に余裕をもってプレゼンの資料を制作し、発表の練習にも時間をとるようにしたい。

優っている点ではプレゼンの時に他のグループは台本を見ながらの読む発表をしていたのに対し、自分たちのグループは台本を見ずに、聞いている人達の様子うかがいながら発表することができた。

連日のようにニュースで目にする東京スカイツリー。約3年半という期間を経て建築され、2012年5月22日に営業を開始した。5日間で100万人以上もの入場者数を記録し、建築物として日本一、電波塔としては世界一であるなど数々の記録を残し、マスメディアなどでも大きな話題となった。これだけ大規模な建造物の完成で一体どのような経済効果が得られるのか疑問に思うと共に、とても興味を持った。したがって我々は東京スカイツリーが及ぼす経済効果について調査し、ゼミナール大会で発表した。

内容としては「東京スカイツリーの情報と他のツリーとの概要」「東京スカイツリーの東武鉄道への収益関係」「各タワーの集客対策」「ソラマチと周辺の商店街の関係性」「観光面からみるスカイツリーの利用価値」の全5節にまとめ、質問事項の回答を加え発表を行った。東京スカイツリー自体が今年に完成したばかりで情報が少なく、今現在でも新しい情報が次々として出ているような状態のため、一部曖昧な部分もあったが、なんとかか形にした。そして発表後の質問として第3節の「各タワーの集客対策」で東京タワーと通天閣の2つのタワーの集客対策があったがこの2つのタワー以外で他のタワー例えば京都タワーなどは調べてないかという質問をいただいた。回答として他にも神戸ポートタワーなどのタワーの調査は行ったが、質問事項に関する返答を現時点で待っている状態でゼミナール大会までに間に合わなかったため、東京タワーと通天閣の2つに絞り、調査したとした。

初めてのゼミナール大会に向け準備を続け、本番をむかえての感想だが、本番では非常に緊張してしまったと思う。他のグループの発表を見てまず感じたのは、文章が比較的少ないということだった。図や写真を多用し、本当に大事な伝えたいことのみを強調し文章として発表していた。そしてPowerPointを見ながら発表者が説明しているグループの発表は非常に理解しやすい印象を受けた。何を調べて、何を得たのか、結果どうなったかといった流れをよく理解出来た。しかし我々の東京スカイツリーの発表は、どちらかという文を長々と読んでそれに合わせてPowerPointを動かすといった内容であったので、聞いている側は、少々理解しづらい内容だっただろう。さらに15分という時間は長いようで、非常に短く、早口で発表してしまい、結果ギリギリ時間制限内で終わったという感じだった。反省点としては、内容をしっかり整理して絞り、自分たちが調査して得たこと、伝えたいことを明確にすべきだったと思う。PowerPointの内容もそれを指しながら付け加えるかたちで説明できるよう改良を加えるべきだった。そうすることで15分という制限時間内でも落ち着いて、分かりやすいプレゼンが出来ただろう。今回のゼミナール大会で経験したことで、反省点や改善点などを知ることが出来たため、今後プレゼンテーションをする場面などで大いに役に立つものとなった。そして東京スカイツリーをテーマに調査をしたことで、東京スカイツリーに関するさまざまなことを知ることが出来た。今までは世界

一高い電波塔が東京に出来、注目されているくらいにしか思っていなかったが、実際調べてみると東京スカイツリーというタワーだけでなくスカイツリータウンや周辺商店街、他の県のタワーへの影響、観光業等の変化や情報も知ることが出来て良かったと思う。さらに東京スカイツリーは開業から9月末までの入場者数が224万人に達したと発表したことにより、開業から1年の入場者数を、540万人から640万人に上方修正するなど、今後も経済に大きく関わってくるだろう。今回の調査で得たさまざまな内容を照らし合わせつつ、今後も東京スカイツリーに注目していきたいと思う。